

美里町文化財調査報告書第5集

化粧坂遺跡

平成21年3月

宮城県美里町教育委員会

化粧坂遺跡

序 文

小牛田・南郷の2町が合併し、美里町が誕生して早くも3年が経過しました。本町では、町民の生涯を通して健康で生きがいの感じられる心豊かな人生を送りたいという願いに応えるため、生涯にわたって主体的に学び楽しむことができるまちづくりを目指して生涯学習振興計画を策定いたしました。なかでも文化財保護行政については、文化遺産が町民はもとより国民共有の貴重な財産であり、次世代に継承していくことが今に生きる我々の重大な責務であるとの考え方から、広く遺跡の所在の周知を図るとともに遺跡と開発とのかかわりが生じた場合には貴重な文化財を積極的に保護し、歴史学習に活用していくことに努めております。

しかしながら、人間の生活様式や活動範囲が時代の変遷とともに変化するのに伴い、文化遺産を取り巻く現状も変化してきました。特に埋蔵文化財は土地との結びつきが強いことから、年々激化する大規模な土地区画整理や個人住宅建設などの各種開発事業のために、破壊・消滅の危機に晒されることが多くなっております。本町においても平成8年に小牛田駅東部地区画整理事業の中で都市計画道路駅東不動堂線が計画されましたが、計画区域に遺跡が含まれていたことから文化財の保存協議を重ねた結果、記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。

本書は、平成15年から平成19年にかけて実施した化粧坂遺跡の調査成果をまとめたものです。これら成果を地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のために役立てていただければ幸いです。

このたびの調査にあたりまして、特に涌谷町教育委員会には本町の諸々の事情をご理解頂いた上、職員の派遣にご協力いただいたことは、調査の遂行のみならず本町の文化財保護行政の環境を整える一助となりました。ここに改めて感謝申し上げます。また計画当初より職員の派遣等、絶大なるご指導、ご支援を頂きました宮城県教育庁文化財保護課、現地で調査作業に当たられた方々、関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。ここに関係各位に対して慎んで敬意を表するとともに、今後も皆様のご指導、ご協力を賜りますことをお願い申し上げる次第です。

平成21年3月

美里町教育委員会

教育長 宮 嶋 健

例　　言

1. 本書は、都市計画道路駅東不動堂線築道工事事業に伴う「化粧坂遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は美里町（旧小牛田町）教育委員会が主体となり、平成15年度確認調査を宮城県教育庁文化財保護課、平成16年度事前調査を涌谷町教育委員会・宮城県教育庁文化財保護課、平成17年度以降の各調査を美里町教育委員会・宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 本書に使用した各遺跡の位置図は、国土交通省国土地理院発行の縮尺=1/25,000の地形図を複製して作成した。
4. 本書における土色の記述については、「新版 標準土色帖 1994年版」（小山・竹原 1994）を用いている。
5. 測量原点の座標値は、世界測地系にもとづく平面直角座標第X系による。
6. 本書で使用した遺構略号は次の通りである。SI: 住居跡 SB: 建物跡 SD: 溝跡 SK: 土坑 Pit: 柱穴 地山粒（～1cm未満） 地山小ブロック（1～2cm） 地山大ブロック（2cm～） 地山大ブロック（4cm～）
7. 本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て、岩瀬竜也（美里町教育委員会）、千葉直樹（宮城県教育委員会）が執筆・編集した。
8. 発掘調査の記録や出土遺物は美里町教育委員会が一括して保管している。

調　　査　要　項

遺跡名：化粧坂遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：39031 遺跡記号：R D）

所在地：宮城県遠田郡美里町字化粧坂・字小町井

調査原因：都市計画道路駅東不動堂線築道工事事業

調査主体：美里町教育委員会

調査協力：涌谷町教育委員会・宮城県教育庁文化財保護課

調査担当：美里町教育委員会・涌谷町教育委員会・宮城県教育庁文化財保護課

平成15年度確認調査：（小牛田町）寒河江克哉（宮城県）佐久間光平 奥山 芳明

平成16年度事前調査：（小牛田町）櫻井純一郎（涌谷町）福山 宗志（宮城県）佐久間光平

平成17年度確認調査：（小牛田町）岩瀬 竜也（宮城県）佐藤 則之 須田 良平 佐藤 憲幸

平成18年度事前調査：（美里町）岩瀬 竜也（宮城県）佐久間光平 佐藤 貴志

平成19年度事前調査：（美里町）岩瀬 竜也（宮城県）村田 晃一 千葉 直樹

調査期間・調査面積

平成15年度確認調査：平成15年4月10日～4月11日…………… 370m²

平成16年度事前調査：平成16年5月10日～5月28日…………… 1,000m²

平成17年度確認調査：平成17年4月21日～4月22日、8月23日 …… 205m²

平成18年度事前調査：平成18年10月30日～11月7日 …… 156m²

平成19年度確認・事前調査：平成19年7月10日～9月28日…… 950m²

目 次

序 文

例 言

調査要項

目 次

第 I 章 調査に至る経緯	1
第 II 章 遺跡の概要	1
1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 周辺の遺跡	3
第 III 章 発掘調査	3
1. 調査の方法と経過	3
2. 基本層序	5
3. 検出遺構と遺物	5
(1) 遺構の検出状況	5
(2) IV 区・IV 区南	5
(3) V 区	7
第 IV 章 総 括	27

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

第Ⅰ章 調査に至る経緯

旧小牛田町（美里町）は、JR小牛田駅の東側において平成8年から駅東部土地区画整理事業を推進してきた。これによって開発された駅東地区と旧市街地との交流・連携を確保し広域的な都市整備を図るため、平成10年、都市計画道路駅東不動堂線築造工事事業を計画した。

工事予定地が古代の散布地として周知される化粧板遺跡の範囲内であったことから、平成14年9月13日に旧小牛田町教育委員会生涯学習課、旧小牛田町都市計画課、宮城県教育庁文化財保護課が協議を行ったところ、工事によって遺跡に影響が及ぶ可能性が高いと判断され、内容把握を目的とする確認調査を行うこととなった。平成15年4月10・11日に宮城県教育委員会が工事予定地である丘陵北西斜面において確認調査を実施し、古代の溝跡などの遺構を検出した。また同時に実施した分布調査の結果、遺跡の範囲が丘陵の南東側へ広がることが明らかになった。これを受けて再度協議を実施したところ、遺跡内で工事の影響が及ぶ範囲について事前調査が必要であるとの判断にいたった。

その後、宮城県教育委員会、涌谷町教育委員会の協力を得て、平成16年5月10日～28日にかけて丘陵北西斜面の道路建設予定地を対象に事前調査を行った。調査の結果、古代の溝跡や土坑などが検出され、丘陵頂上付近から南東斜面にも造構が分布していることが予想された。このため再度現地にて協議を行い、この部分についても調査を実施する必要があることを確認した。

以後は、宮城県教育委員会の協力の下、旧小牛田町教育委員会（平成18年1月の合併後は美里町教育委員会）が調査を担当し、平成17年4月、8月、平成18年2月に丘陵南斜面で家屋の移転先ならびに道路建設予定地の確認調査と家屋撤去に伴う工事の立会をそれぞれ行った。その結果、表土より須恵器片が発見されたが造構は検出されず、工事による遺跡への影響はないとの判断された。平成18年10月30日～11月7日に家屋移転の終了した丘陵頂部付近の一部について事前調査したところ、古代の堅穴住居跡などが検出され、丘陵頂部付近に造構が分布していることが判明した。（第2図）

この間に平成16年度の事前調査区の北側隣接地に公園設置計画が策定され、予定地部分の確認調査が必要となった。また新設道路へ接続する既設道路を2m以上掘り下げる計画になっていたため、新設道路部分と併せて事前調査を行うこととした。以上の経過を踏まえ、予定地内の全ての用地買収・家屋移転の終了を受けて、平成19年7月10日～9月28日にかけて未調査部分となる約950m²を対象に確認調査および事前調査を実施した。

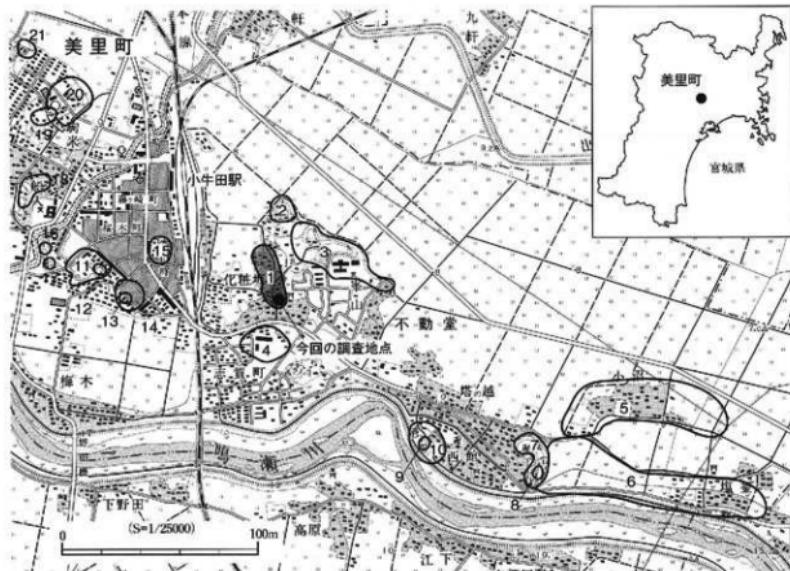
第Ⅱ章 遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地理的環境

化粧板遺跡は、宮城県遠田郡美里町字化粧板に所在する（第1図）。美里町は仙台市から北東に約40km離れた県北中央部に位置し、地理的には江合川や鳴瀬川が流れる大崎平野東縁部にある。南には大松沢丘陵が西から東へ延び、北には箇岳丘陵が南東方向に延びている。これらの間を江合川と鳴瀬

川が東流し、川沿いと低地内には東西あるいは北西－南東方向に延びる自然堤防が発達している。また両河川の間には標高15～30mほどの低丘陵が残っており、遺跡のある不動堂地区もこの一つにあたる。

遺跡は美里町JR小牛田駅から南東に約1km離れた位置にあり、標高約17mの低丘陵上に立地する。その範囲は東西約170m、南北約300mに及び、現況ではほとんどが宅地として利用されている。



No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	化粧坂遺跡	丘陵	散在地	縄文、古代
2	小河井遺跡	丘陵	散在地	古代
3	墨山遺跡	丘陵	散在地	縄文後期、古代
4	志賀宝塚跡	丘陵	城跡	中世
5	小沼遺跡・孤山遺跡	自然斜面	散在地	古代、中世
6	一本柳遺跡	丘陵斜面	集落	奈良・平安、中世、近世
7	般若寺跡	丘陵	城跡	中世
8	吹奏寺古墳	丘陵	円墳	古墳中期
9	鶴淵山古墳	自然斜面	古墳	古墳
10	西船跡	丘陵斜面	城跡	中世、近世
11	東山貝塚	丘陵	貝塚	縄文早彌期
12	貝塚塚古墳	丘陵	円墳	奈良
13	鳴塚六塚	丘陵	円墳	古墳後期
14	御院走跡	丘陵	散在地	六代
15	北鉢塚古墳	丘陵	前方後円墳	古墳中期
16	保上塚古墳	丘陵	円墳	古墳中期
17	龍船形古墳	丘陵	円墳	古墳中期
18	新入道跡	丘陵斜面	散布地	古文後期
19	八喜古墳群	丘陵	円墳	古墳後期
20	新米遺跡	丘陵	集落	绳文、古墳中期・後期、奈良、平安、中世、近世
21	東谷地古墳	自然斜面	円墳	古墳後期

第1図 化粧坂遺跡の位置と周辺の遺跡

2. 周辺の遺跡

美里町内には縄文時代から近世までの遺跡が数多く存在する（第1図）。縄文時代の遺跡は標高20～30mほどの低丘陵上に分布しており、早期の素山貝塚、前～後期の彌生遺跡、早～中期の山前遺跡、新山前貝塚、後期の船入遺跡、晩期の峯山遺跡などがみられる。弥生時代の遺跡は少なく、新山前貝塚、彌生遺跡で遺物が発見されているのみである。

古墳時代の遺跡では、古墳が低丘陵ないしは自然堤防上に分布している。岐善寺古墳や京銭塚古墳、保土塚古墳などの前・中期の古墳と時期が不明なものも含めて17の古墳が確認されている。集落跡としては国指定史跡山前遺跡、駒米遺跡などがあり、前者では前期の堅穴住居群とともにこれらを区画する大溝跡が発見されている。

奈良・平安時代の遺跡には駒米遺跡、一本柳遺跡、小沼遺跡、峯山遺跡、狐山遺跡などの集落跡がある。これまでに駒米遺跡、一本柳遺跡、小沼遺跡では発掘調査が行われており、この時期の集落の状況が解明されつつある。

中世の遺跡の多くは館跡であり、一本柳遺跡のある不動堂地区の低丘陵上には一本柳遺跡と岐善寺館跡、西館跡、志賀堂城跡が近接して存在する。また、牛飼地区にある応安四年（1371）の銘を持つ大型の板碑をはじめ、鎌倉～南北朝時代にかけての板碑が町内には多数残されている。

第Ⅲ章 発掘調査

1. 調査の方法と経過

本調査は美里町教育委員会（旧小牛田町教育委員会）が主体となり、宮城県教育委員会と涌谷町教育委員会が協力した。調査対象は、主に新設道路工事部分とそれに接続する現道路の改良に伴い掘削を受ける範囲で、これらについて事前調査を行った。また、新設道路脇の公園予定地と現道路に付設される歩道部分については確認調査を行った。

事前調査は、工事工程の都合と生活道路を確保する必要から、平成16年5月10日～5月28日（第1次調査）、平成18年10月30日～11月7日（第2次調査）、平成19年7月10日～9月28日（第3次調査）に分けて実施した。

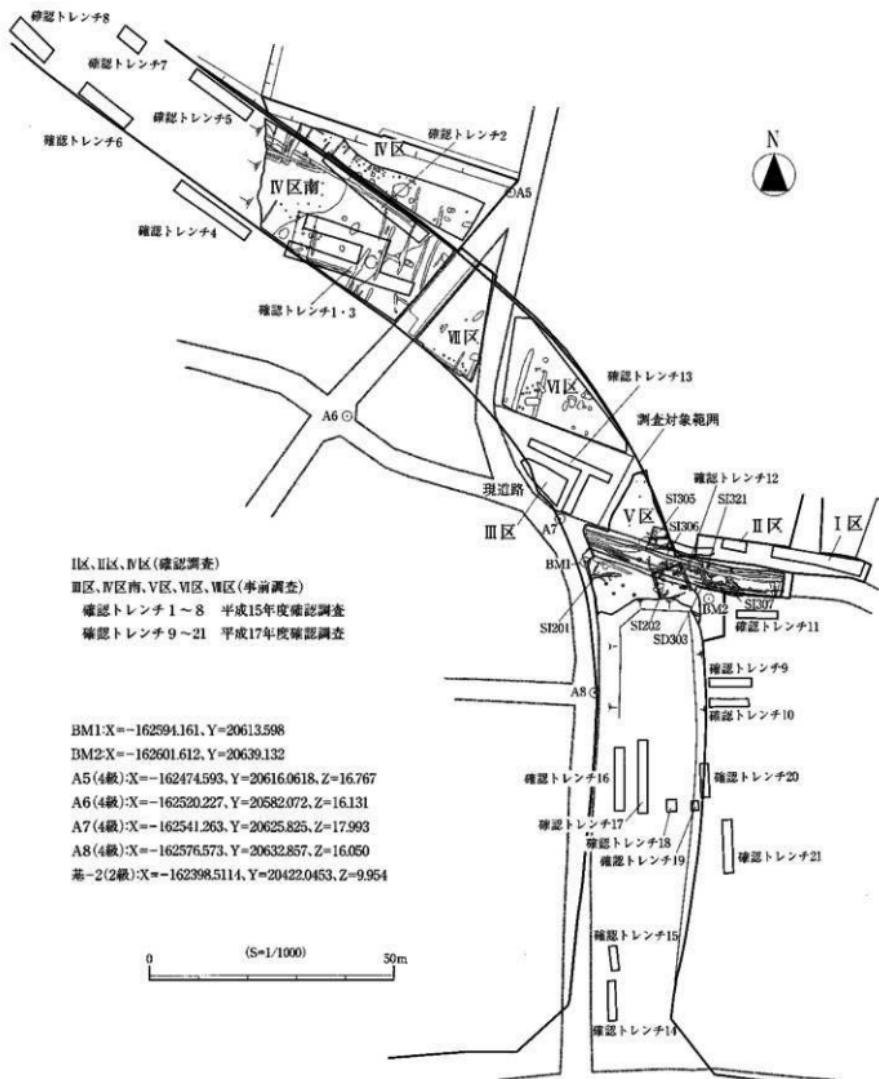
調査区は、丘陵頂部から南東斜面にI、II、III、V区、丘陵北西斜面にIV、IV区南、VI、VII区を設けた。なお、VI区とVII区間の現道路部分については工事の際に立ち会ったが、遺構は検出されなかった。

調査区の中で遺構の集中するV区では調査に近接した2カ所に任意の基準点（BM1、BM2）を設け、これを結ぶ線を東西の基準線とした。また、これと直行する南北の軸をもとに3m方眼を組み、1/20平面図を作成した。その他の調査区については遺構密度に応じて1/60平面図、1/100平面図を平板測量で作成し、建物跡が検出された地点については1/20平面図を作成した。また、断面図については遺構の検出状況に応じて1/20で作成した。

写真撮影については35mmモノクロおよびカラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ（500万画素）

を使用した。

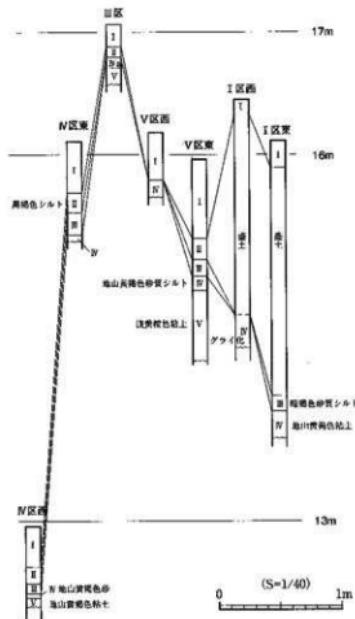
測量にあたってそれぞれ基準とした世界測地系に基づく各基準点の座標値は第2図の通りである。また標高については、付近にある2級基準点「基-2：9.954m」も利用した。



第2図 調査区の位置

2. 基本層序

遺跡は標高10~18mほどの小丘陵上に所在し、I、II、V区は丘陵東から南斜面に、III区は丘陵頂部、IV・IV区南、VI、VII区は北西斜面にある。堆積層は基本的に共通しており、大別層位で5層確認している(第3図)。遺構確認面は、暗褐色砂質シルト(第III層)または黄褐色地山粘土(第IV層)である。I、II、IV、V区北側では表土下に0.8~1.8mの現代の盛土があり、原地形の緩斜面からは大きく改変されている。また、削平されている地点が多く、地表または盛土直下がすぐ地山面になっているところが多い。第IV層の検出レベルを比較すると、古代の住居跡や土坑などが検出された南東斜面は比較的傾斜が緩やかで、北西斜面はそれに比べて急であることがわかる。



第3図 基本層序

3. 検出遺構と遺物

(1) 遺構の検出状況

検出遺構には堅穴住居跡10軒、掘立柱建物跡2棟、溝跡43条、土坑30基、柱穴などがある。このうちほとんどの遺構はIV区、IV区南、V区から検出された。I~III、VI、VII区については搅乱や削平された部分が多く遺構は検出されなかった。以下では遺構が検出されたIV区とV区についてそれぞれ遺構ごとに記述する。

(2) N区・IV区南

IV区(平成19年度確認調査)、IV区南(平成16年度事前調査)から掘立柱建物跡2棟、溝跡35条、土坑19基などを検出した(第4図)。このうち古代の遺構と考えられるのは、SD101、SD102溝跡、SK301、SK302土坑である。そのほかの遺構は近世以降または時期不明である。遺物は遺構確認面や溝跡、土坑などから土師器壺、須恵器壺(第5図)などが出土している。以下では主なものについて説明する。

【SD101溝跡】(第4図)

IV区・IV区南で検出した南北方向の溝跡である。SD124、SD125、SD126、SD127、SD130溝跡と重複し、これらより古い。検出長は47.1mで、東西方向に直線的に延び、東端で北に向かってL字状に屈曲する。上幅0.6~0.8m、下幅0.3~0.4mである。深さは40~60cmで断面形はU字状である。堆積土は4層で、暗褐色細砂を主体とする自然堆積である。1層上部に灰白色火山灰が薄く堆積している。遺物は土師器が少数出土しているが、図示できるものはなかった。

【S D102溝跡】(第4図)

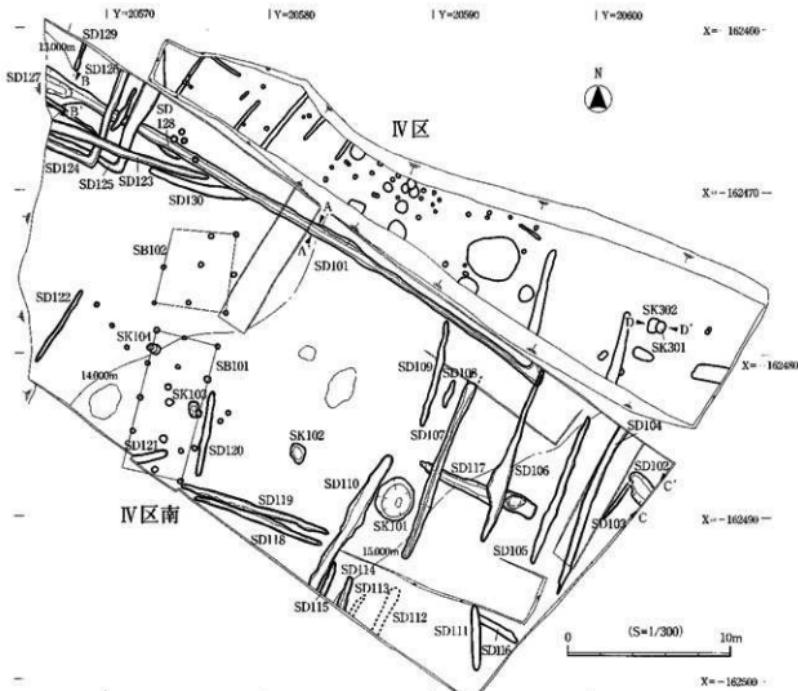
IV区南調査区東端で検出した東西方向の溝跡である。重複はない。検出長は1.7mで、東側は調査区東壁からさらに延びる。上幅約1.5m、下幅約0.7mである。深さは30~40cmで断面形は皿状である。堆積土は5層で、暗褐色砂質シルトを主体とする自然堆積である。遺物は土師器が少数出土しているが、図示できるものはなかった。

【SK301土坑】(第5図)

V区東部で検出した。SK302土坑と重複し、これより新しい。直径77cmの円形である。深さは約10cmで断面形は浅い皿状である。堆積土は2層で、炭、焼土粒をわずかに含む暗褐色シルトで埋め戻されている。遺物は土師器が少数出土しているが、図示できるものはなかった。

【SK302土坑】(第5図)

V区東部で検出した。SK301土坑と重複し、これより古い。長径105cm、短径76cm以上の楕円形である。深さは約20cm、断面形は皿状で、底面や壁に部分的に焼面がみられる。堆積土は4層で、炭、焼土粒を含む黒色シルトで埋め戻されている。遺物は土師器が少数出土しているが、図示できるものはなかった。



第4図 IV区・V区南平面図

層	土色	土性	備考	層の性格
SD101 (A - A')	1 黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	灰白色火成岩がわずかに混在	自然堆積
	2 白褐色 (10YR3/4)	砂	炭化物をわずかに含む	自然堆積
	3 灰褐色 (10YR5/2)	砂	炭化物がわずかに混在	自然堆積
	4 明褐色 (10YR3/3)	砂	地山小プロックをわずかに含む。砂粒や多く含む。	自然堆積
SD102 (C - C')	1 藍色 (10YR2/1)	シルト	灰白色火成岩ブロックがわずかにまじる	自然堆積
	2 にべん・黄褐色 (10YR6/4)	シルト	灰白色火成岩	自然堆積
	3 黑褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	炭化物をわずかに含む	自然堆積
	4 明褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	砂粒を多く含む	自然堆積
	5 灰褐色 (10YR4/2)	シルト質粘土	ややグライ化	自然堆積

層	土色	土性	備考	層の性格
SK301 SK302 (D - D')	1 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	灰暗、粘土質わずかに含む	人為堆積
	2 暗褐色 (10YR3/3)	シルト	灰暗、礫土質、塊山プロックわずかに含む	人為堆積
	3 暗褐色 (10YR3/3)	シルト	灰暗、塊土質、塊山絆をわずかに含む	自然堆積
	4 暗褐色 (10YR2/1)	シルト	炭化物が非常に多く含む。粘土質わずかに含む	人為堆積
	5 暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	炭化物が非常に多く含む	人為堆積
	6 黄褐色 (10YR2/1)	シルト	炭化物が非常に多く含む。块山に構成する種類である。塊山プロックわずかに含む	人為堆積

No.	部機	道標 / 墓	残存	高さ (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	特徴	写真枚数	登録
1	須恵器壺	V区 周溝堆積跡	1/3	14.00	6.00	3.5	内外: マクロナメ【底】切り離し不明→ヘラケズリ	14 - 13	17	

第5図 IV区・V区南検出溝跡・土坑・出土遺物

(3) V区

検出遺構は、竪穴住居跡10軒、溝跡8条、土坑11基などである。これらの遺構の時期は奈良・平安時代を主体とするが、一部には時期不明のものもある。遺物は住居跡床面や堆積土などから土師器壺、壺、須恵器壺が出土している。また、古代の遺構堆積土や遺構確認面から縄文土器、石器が各1点出土している。以下では主なものについて説明する。なお、遺構のおおよその位置については第6図のようにV区北部、東部、中央、西部に分けて記述する。(第6図)

A. 竪穴住居跡

[S 1 201住居跡] (第7図)

V区西部で検出した。後世の削平により周溝と掘方埋土の一部のみ確認した。壁、床面、柱穴、カマド、堆積土については不明である。

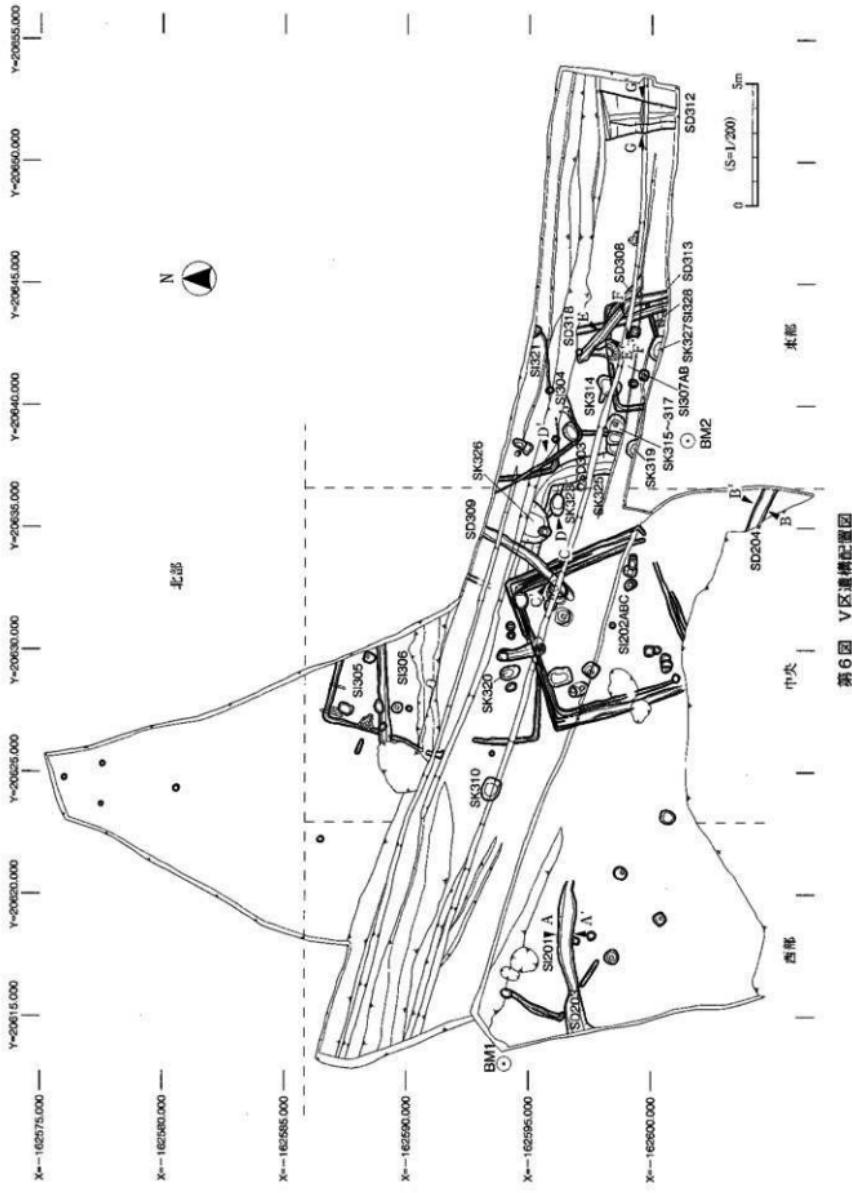
〔重複〕 S D203溝跡と重複し、これよりも古い。

〔規模・平面形〕 南北2.5m以上、東西2.9m以上で、平面形は方形とみられる。

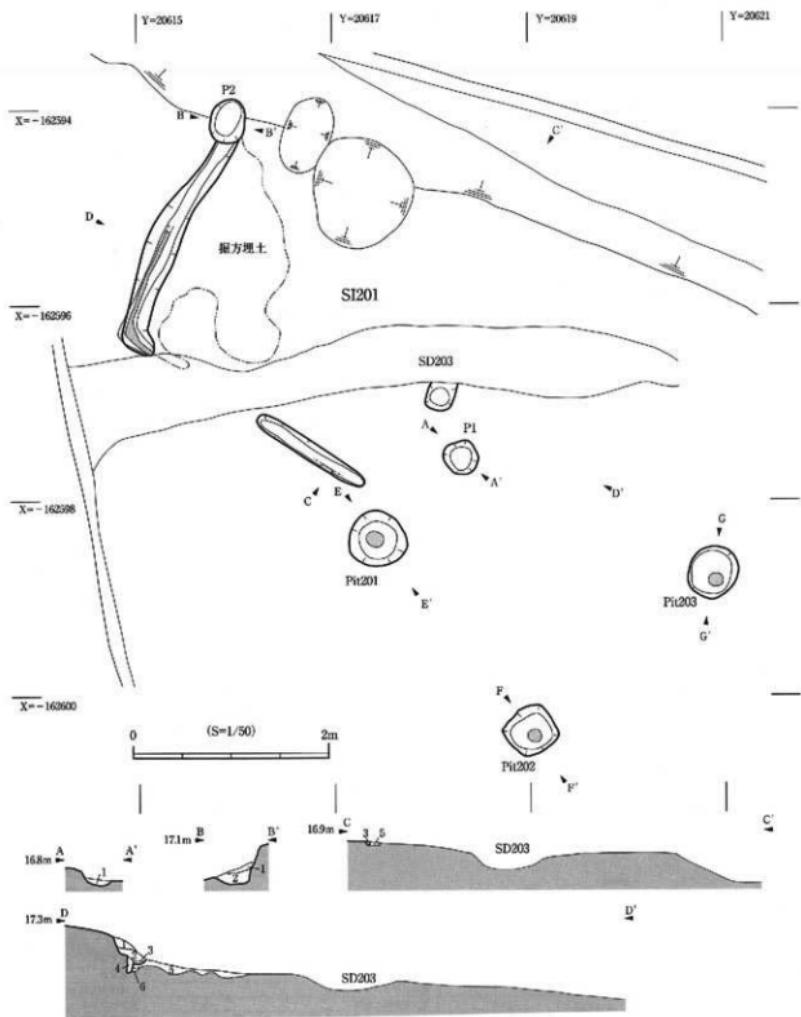
〔方向〕 西辺でみると北で約27° 東に偏する。

〔周溝〕 西辺と南辺の一部を確認した。住居を全周していたと考えられる。幅約6cmの壁材痕跡が認められる。上幅20~34cm、深さ12cmで、断面形はU字状である。埋土は地山プロックを多く含むにぶい黄褐色シルトで、住居掘方が周溝掘方を兼ねる。

〔出土遺物〕 周溝堆積土から須恵器壺、土師器壺などが出土しているが図示できるものはなかった。



第6図 V区遺構配置図



層	土色	土性	備考	層の性格
P1 (A - A')	1 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト		
	2 黄色 (10YR4/4)	シルト	地山小ブロック含む。焼土较少し含む	自然堆積
P2 (B - B')	2 黄色 (10YR4/4)	シルト	地山小ブロック含む。1層よりやや多い。	自然堆積
	1 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	焼土、焼土較若干含む。地山小ブロック含む	
SD201 (C - C') (D - D')	2 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	炭粒を含む	高瀬内堆積土 (自然堆積)
	3 黄褐色 (10YR3/3)	シルト	地山を少し含む	
	4 黄褐色 (10YR3/4)	シルト	は淀物質	壁材層
	5 にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山小ブロック、黄褐色ブロック主体	転方埋土
	6 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	は淀物質。地山を少し含む	転方埋土

第7図 SI201 住居跡 平・断面図

【S I 202A・B・C住居跡】(第8、9図)

V区中央で検出した。南部のほとんどは削平され周溝のみを確認した。2度建て替えられ、わずかずつ拡張されている。古い方からA、B、Cとする。

【重複】 S I 306住居跡、S D 303、S D 309溝跡と重複し、S I 306住居跡、S D 303溝跡より新しく、S D 309溝跡より古い。

〈S I 202A住居跡〉

周溝と主柱穴のみを確認した。

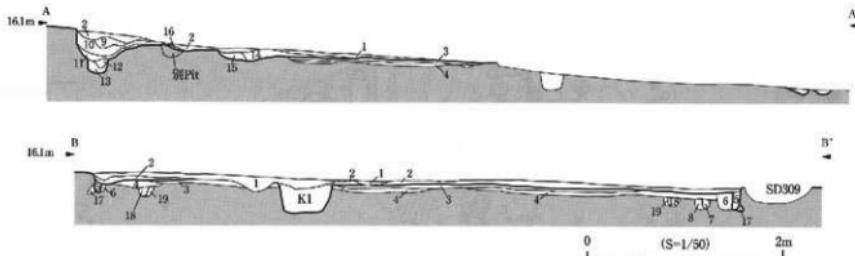
【規模・平面形】 南北約5.6m、東西約5.5mで、平面形は方形である。

【方向】 西辺でみると北で17°西に偏する。

【柱穴】 主柱穴を4個(A-P1、P2、P3、P4)確認した。3ヶ所で柱痕跡を、4カ所で柱抜取穴を確認した。平面形は一辺約60cmの隅丸方形と長径55cm、短径40cmの楕円形で、深さは残りの良い北側柱列で45~55cmである。埋土は地山ブロックを含むにぶい黄褐色シルトを主体とする。柱痕跡は直径15~20cmの円形で、堆積土は黒褐色または黄褐色砂質シルトである。

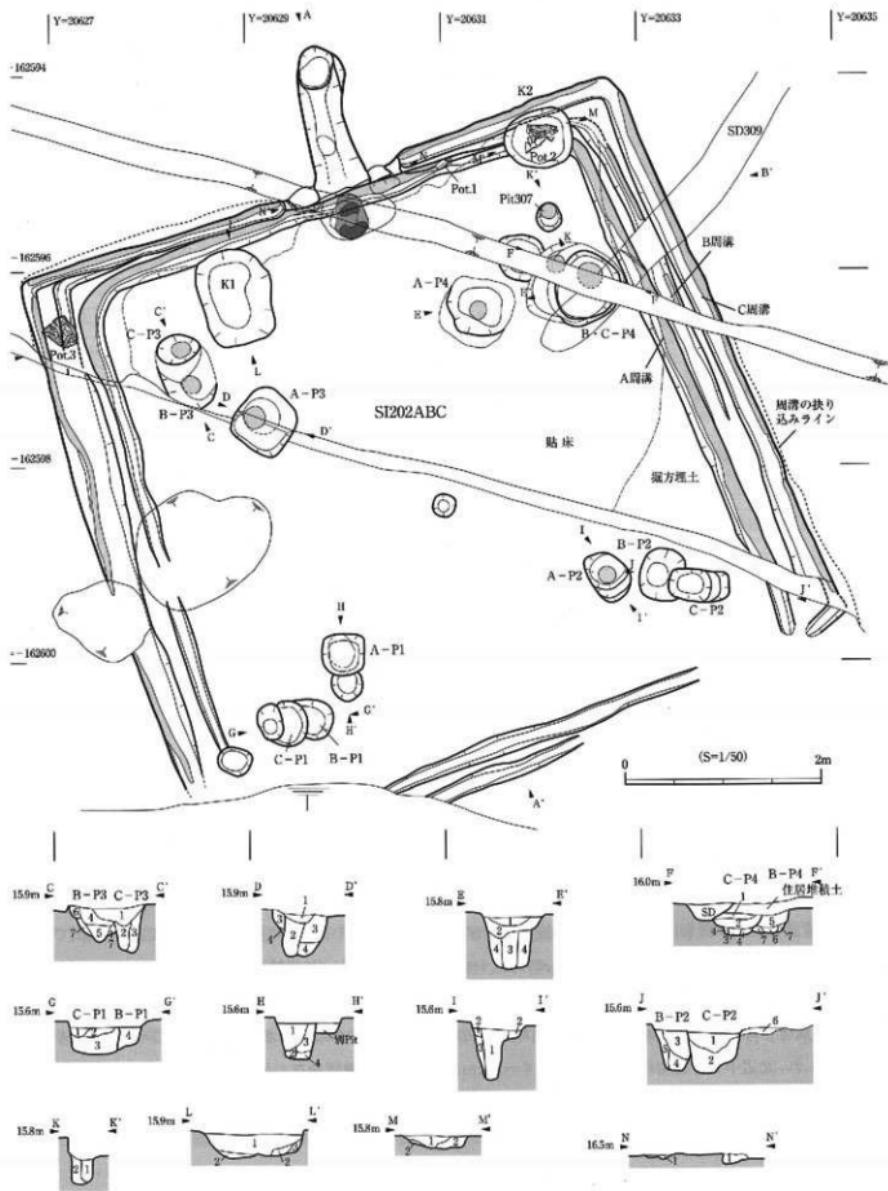
【周溝】 南辺の一部が削平されているが、住居をほぼ全周する。北半部で幅8~12cmの壁材抜取痕が認められる。上幅16~20cm、深さ12cmで、断面形はU字状である。埋土は地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色粘土質シルトまたは暗褐色シルトである。

【出土遺物】 挖方埋土や周溝から土師器壊などが出土しているが図示できるものはなかった。



層	土色	土性	縁名	層の性格
SI202 (A-A') (B-B')	灰青褐色 (10YR5-2)	砂質シルト	灰土を含む、埴跡のカクランの影響を大きく受けた	堆積土
	暗褐色 (10YR3-4)	シルト	埴土粒、斑状を含む	堆積土
	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山大ブロックを非常に多く含む	堆积
	暗褐色 (10YR3-3)	シルト	地山ブロックを多く含む	C樹木堆土
	黒褐色 (10YR3-2)	シルト	地山ブロックを非常に多く含む	C樹木堆積
	黒褐色 (10YR3-2)	シルト	地山ブロックを多く含む	D樹木堆積物上
	暗褐色 (10YR3-2)	シルト	地山ブロックを少し含む	B被付抜取板
	暗褐色 (10YR3-2)	シルト	地山ブロックを非常に多く含む	B被付被付板上
	暗褐色 (10YR3-2)	シルト	地山ブロックを含む、灰土を若干含む	堆積土
	暗褐色 (10YR3-2)	シルト	地山ブロックを含む、灰土を若干含む	堆積土
	暗褐色 (10YR3-4)	シルト	地山ブロック、灰土を若干含む	堆積土
	暗褐色 (10YR3-4)	シルト	灰土を樹状に含む、表面道筋土含む	堆積土
	暗褐色 (10YR3-4)	シルト	地山ブロック、地土粒を若干含む	堆積土
	黒褐色 (10YR2-3)	粘土質シルト	灰土を樹状に含む、地山大ブロックを含む	堆積土
	暗褐色 (10YR3-4)	シルト	地山小ブロックを多く含む、灰土を若干含む	カマド底敷土
	暗褐色 (10YR3-4)	シルト	地山粒、灰土を若干含む	カマド底敷土
	暗褐色 (10YR3-4)	シルト	地山小ブロックを多く含む、灰土、地土粒を若干含む	織遺物堆土
	黒褐色 (10YR3-4)	シルト	地山段段を含む、比較的均質	C周辺洗掘堆土
	黒褐色 (10YR3-4)	シルト	地山プロック、灰土を多く含む	A被付被取板
	にじい灰褐色 (10YR4-2)	シルト	地山プロック、灰土を多く含む	A被付被取板
	にじい灰褐色 (10YR5-4)	粘土質シルト	地山プロックを多く含む	A被付被取板

第8図 SI201 住居跡 断面図



第9図 SI201 住居跡 平・断面図 (1)

	層	土 色	土 性	備 考	層の性格
B-C-P3 (C-C')	1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山小ブロック、地山土質を少し含む	C柱抜取穴
	2	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山小ブロックを多く含む	C柱灰
	3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	電柱小ブロックを多く含む	C柱灰土
	4	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山小ブロック、灰土を含む	B柱灰土
	5	褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを多く含む、炭粒を含む	B柱灰土
	6	褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを多く含む	B柱灰土
	7	褐色 (10YR3/4)	シルト	地山小ブロックを多く含む、炭粒を含む	B柱灰土
A-P3 (D-D')	1	褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを少し含む	A柱抜取穴
	2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山小ブロックを含む	A柱灰
	3	褐色 (10YR3/4)	シルト	地山小ブロックを多く含む	A柱灰土
A-P4 (E-E')	1	褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	地山小ブロック、地山土質を多く含む	A柱抜取穴
	2	にべい 黄褐色 (10YR5/3)	シルト	地山小ブロック、炭土を含む	A柱灰土
	3	褐色 (25YR6/3)	砂質シルト	地山小ブロック主体	A柱抜取穴
	4	灰色 (25YR5/4)	シルト	炭粒を含む	A柱灰
	5	褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロックを多く含む	A柱灰土
	6	にべい 黄褐色 (25YR4/3)	シルト	地山小ブロック、地山土質を多く含む	B柱灰土
	7	にべい 黄褐色 (10YR5/3)	シルト	地山小ブロックを少し含む	B柱灰
B-C-P4 (F-F')	1	黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山小ブロックを少し含む	C柱抜取穴
	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロック、地山土質を多く含む	C柱灰土
	3	暗褐色 (25YR4/2)	シルト	地山小ブロック、地山土質を多く含む	C柱灰
	4	褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを多く含む	B柱灰土
	5	にべい 黄褐色 (10YR5/3)	シルト	地山小ブロックを少し含む	A柱抜取穴
	6	にべい 黄褐色 (10YR5/3)	シルト	地山小ブロックを多く含む	A柱灰土
	7	にべい 黄褐色 (10YR5/3)	シルト	地山小ブロックを少し含む	A柱灰土
B-C-P1 (G-G')	1	褐色 (10YR4/2)	シルト	地山小ブロックを少し含む	C柱抜取穴
	2	にべい 黄褐色 (10YR5/3)	シルト	地山小ブロックと黒褐色シルト小ブロック主体	C柱灰土
	3	にべい 黄褐色 (10YR5/3)	シルト	2層に比べ暗褐色シルトブロックを多く含む	C柱灰土
	4	褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを多く含む	B柱灰土
	5	にべい 黄褐色 (10YR5/3)	シルト	地山小ブロックを少し含む	A柱抜取穴
	6	褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロックを多く含む	A柱灰土
	7	褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロックと黒褐色シルトブロック主体	A柱灰土
A-P1 (H-H')	1	褐色 (10YR3/2)	シルト	3層に比べ暗褐色シルトブロック少ない	A柱灰土
	2	褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロックを多く含む	A柱灰土
	3	褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロックを多く含む	A柱灰土
	4	にべい 黄褐色 (10YR5/3)	シルト	地山小ブロックを多く含む	A柱灰土
	5	褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロックを少し含む	A柱灰土
	6	褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロックを含む	A柱灰土
	7	褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロックを多く含む	A柱灰土
B-C-P2 (I-I')	1	にべい 黄褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックと暗褐色シルト小ブロック主体	C柱灰土
	2	にべい 黄褐色 (10YR3/3)	シルト	1層に比べ暗褐色シルトブロックを多く含む	C柱灰土
	3	にべい 黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山小ブロックと暗褐色シルトブロック主体	C柱灰土
	4	褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを少し含む	B柱灰土
	5	褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロックを多く含む	B柱灰
	6	褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロックを少し含む	B柱灰土
	7	褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロックを含む	B柱灰土
Pz-307 (K-K')	1	褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	地山小ブロックと暗褐色シルトブロック主体	自作耕翻面土
	2	褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	1層に比べ暗褐色シルトブロックを多く含む	C柱灰土
K1 (L-L')	1	褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	地山小ブロックと暗褐色シルトブロック主体	C柱灰土
	2	にべい 黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山小ブロック、炭土を多く含む	B柱灰土
	3	褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロック、地山土質を含む	B柱灰
K2 (M-M')	1	褐色 (10YR4/2)	シルト	地山小ブロック、地山土質を含む、Tot2出土	B柱灰
	2	褐色 (10YR3/2)	シルト	地山小ブロック、地山土質を含む	B柱灰
全マダ-1-N'	1	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山土質を含む	Cカマド陶器

第9図 SI201 住居跡 平・断面図(2)

S I 202B 住居跡

周溝と主柱穴のみを確認した。

[規模・平面形] 南北約5.8m、東西約5.9mで、平面形は方形である。

[方向] 東辺でみると北で23°西に偏する。

[柱穴] 主柱穴を4個(B-P1、P2、P3、P4)確認した。2ヶ所で柱痕跡を、3ヶ所で柱抜取穴を確認した。平面形は長径約50cm、短径40cmの楕円形で、深さは残りの良い北側柱列で25~36cmである。埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトを主体とする。柱痕跡は直径15cmの円形で、埋土は地山ブロックと炭粒を含む暗褐色またはにぶい黄褐色シルトである。

[周溝] 南半部はほとんどが削平またはS I 202C住居跡に壊されているが、住居をほぼ周囲すると考えられ、北辺中央で途切れる。東辺で幅4~5cmの壁材痕跡を確認した。上幅12~16cm、深さ14cmで、断面形はU字状である。埋土は地山ブロックを非常に多く含む暗褐色シルトである。

[カマド] 不明だが、周溝が北辺中央で途切れることからS I 202C住居跡と同位置にあったと推定される。

[貯藏穴] カマド左脇で1基確認した(K1)。長軸100cm、短軸75cmの隅丸方形で、深さは約30cm

である。焼土・炭、地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで人為的に埋め戻されている。S I 202C住居跡の貼床を一段掘り下げた段階で確認したことと、S I 202B住居跡周溝を壊して掘り込まれていることからS I 202B住居跡に伴う貯蔵穴と考えられる。

【出土遺物】掘方埋土や周溝から土師器壺などが出土しているが図示できるものはなかった。

〈S I 202C住居跡〉

【規模・平面形】南北約6.3m、東西約6.4mで、平面形は方形である。

【方向】西辺でみると北で18° 西に偏する。

【壁】ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は残りの良い北辺で約10cmである。

【床面】床面が残存する北側でみると、住居の壁際を除くほぼ全体に厚さ4cmほどの貼床をし、そのほかは掘方埋土を床面としている。

【柱穴】主柱穴を4個(C-P1、P2、P3、P4)確認した。2ヶ所で柱痕跡と柱抜取穴を確認した。長径50~70cm、短径34~60cmの楕円形で、深さは残りの良い北側柱列で28~50cmである。埋土は地山ブロックを含むにぶい黄褐色粘土質シルトを主体とする。柱痕跡は直径約15cmの円形で、堆積土は褐色シルトである。

【周溝】南辺の一部が削平されているが、住居をほぼ全周し、北辺中央で途切れる。周溝は上幅12~24cm、深さ14~20cmで、断面形は「く」の字状である。幅4~5cmの壁材痕跡が認められ、埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。周溝の外側に住居壁を斜め下方に12cm抉り込んだ溝状の掘り込みがあり、地山ブロックを少し含む黒褐色シルトが堆積している。

【カマド】北辺中央に付設されている。側壁の一部と燃焼部、煙道が残存する。燃焼部の大きさは幅45cm、奥行き約50cmである。燃焼部底面は皿状に窪んでいる。奥壁は住居壁よりやや内側である。カマド側壁は地山粘土を含む褐色シルトで構築している。奥壁で約10cmの段がついて煙道へと至る。煙道は長さ145cm、幅約40cm、深さ約10cmで、先端部に煙出ビットがある。煙出ビットは直径約40cmの円形で、深さ約30cmである。堆積土は、炭や煙道崩落土を含む暗褐色シルトを主体とする自然堆積である。

【貯蔵穴】カマド右脇の床面北東隅で1基確認した(K2)。長径70cm、短径60cmの楕円形で、深さは約16cmである。埋土は2層で焼土・炭、地山ブロックを含む暗褐色シルトで人為的に埋め戻されている。1層から土師器壺(Pot.2)が床面上に一部突き出る形で出土している。

【堆積土】2層で灰黄褐色砂質シルトと暗褐色シルトが自然堆積している。

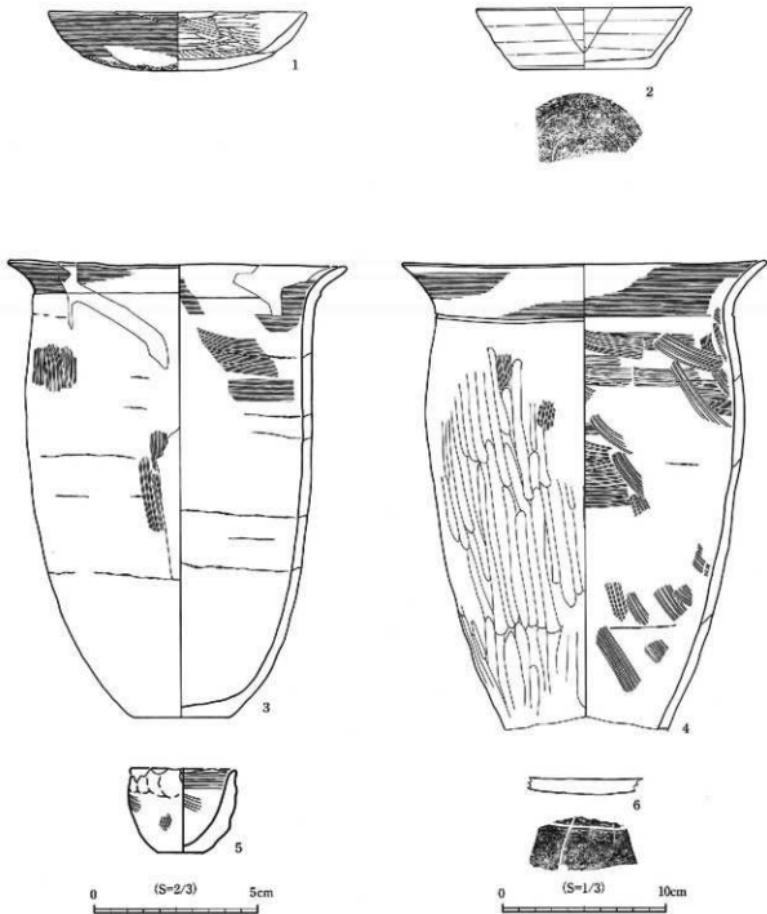
【出土遺物】床面から土師器壺、壺が出土した(第10図)。壺(Pot.1)はカマド右脇から、壺(Pot.2)は貯蔵穴(K2)埋土1層から出土した。壺(Pot.3)は北西壁付近から出土している。

【その他】このほか住居跡北東隅でPit307を検出した。S I 202C住居跡掘方埋土より古く、S I 202A・B住居跡との新旧関係は不明である。

【S I 305住居跡】(第11、12図)

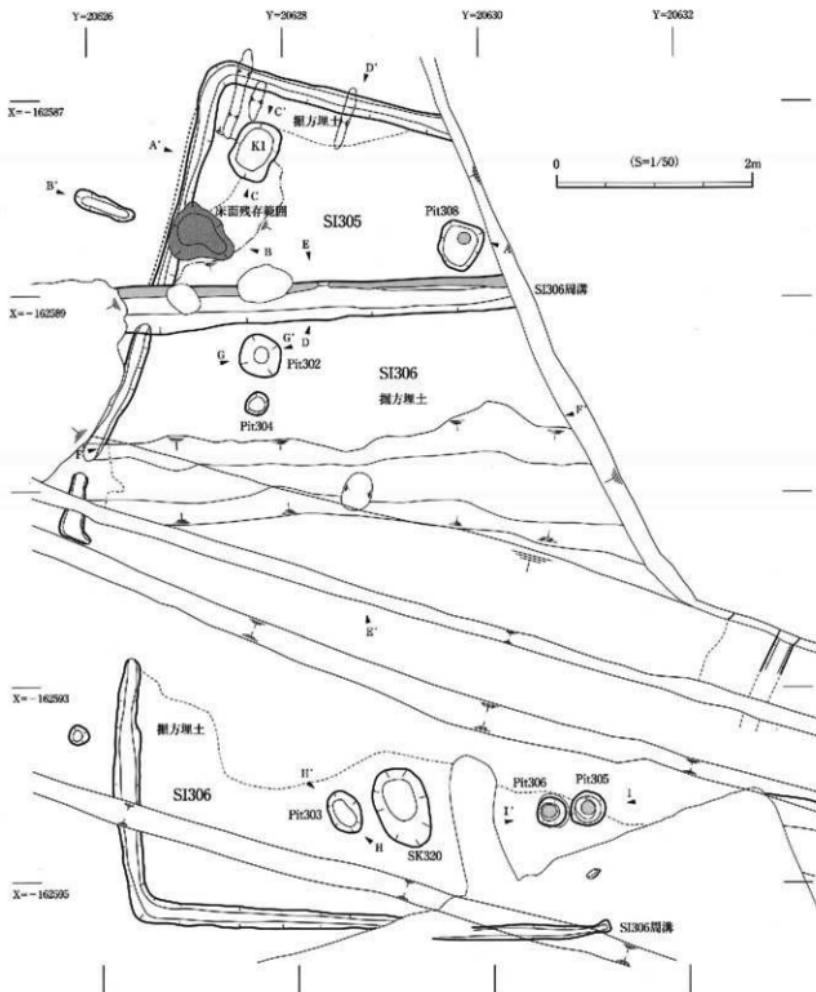
V区中央で検出した。大部分が削平され、周溝とカマド燃焼部、貯蔵穴と掘方埋土の一部のみ残存している。

【重複】S I 202、S I 306住居跡と重複し、これらより古い。



No.	器種	遺跡/層	残存 口 径	底 径	高	寸 量 (cm)		特 質	写真図版	登 錄
						外	内			
1	土器器 杯	SI202C Pot.1 底直	1/2	(15.6)	-	3.6		外：ヨコナギ「底」手持らハラケズリ 内：ヘミガキ→黒色処理	14-1	11
2	粗窓器 杯	SI202C - P4 深方理土	1/4	(13.2)	0.0	3.8		内鉢：ロクロナギ〔底〕切り離し不滑→刮板へハケズリ	14-6	9
3	土器器 壺	SI202C Pot.3 底	7/8	20.8	5.6	27.0		外：〔口〕ヨコナギ〔底〕ハケメ→ケズリ（半減） 内：〔口〕ヨコナギ〔底〕ナギ（底延）外素面化物付着	13-6	13
4	土器器 壺	SI202C K2 Pot.2	1/3	(22.2)	-	-		外：ヨコナギ〔口〕ハケメ→ヘラミガキ（一部摩滅・化物付着）底部に沈線 内：〔口〕ヨコナギ〔底〕ハケメ	13-7	12
5	手捏土器	P4267 枝抜穴	4/5	-	1.4	2.7		外：オサエ／ナヂ 内：ナヂ 口縁部微削 体部剥落	14-2	6
6	土器器 杯	SI202B 深方理土	底直	-	-	-		〔底〕焼成面剥落「×」→2ガキ 内：ヘミガキ→黒色処理	14-5	7

第10図 SI201 住居跡 出土遺物

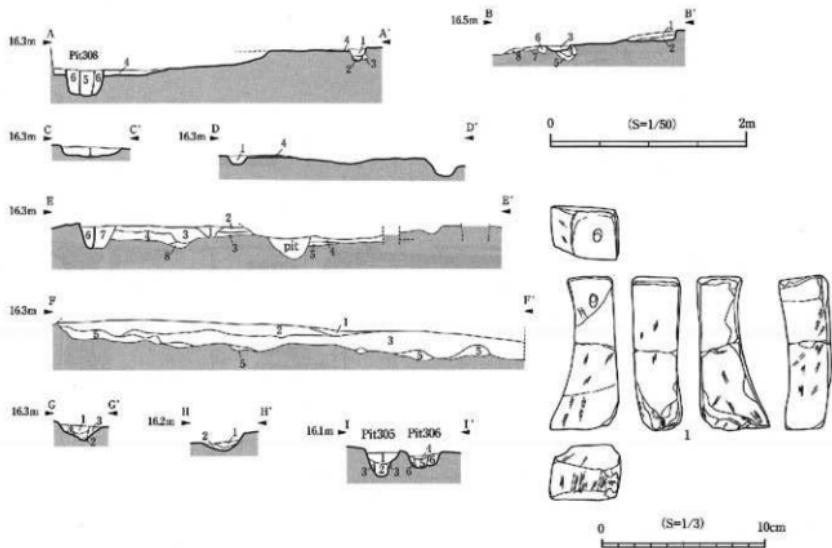


第 11 図 SI305・SI306 住居跡 平・断面図 (1)

〔規模・平面形〕南北約5.2m以上、東西約7.3mで、平面形は方形である。

〔方向〕西辺でみると北で15° 東に偏する。

〔床面〕ほとんど削平され不明な点が多いが、カマド周辺の地山と掘方埋土上面に炭ブロックの広がりが認められることからこの付近は床が残存しているものと思われる。このことからカマド付近は地山を床とし、壁際は掘方埋土を床としている可能性が高い。



No.	器種	地緯 / 解	現存	特徴	写真図版	目録
1	縦溝石	SI305 完形		縦溝黄砂岩質 長94cm×最厚24cm・横 大底41cm×厚21cm 既往存 経過し化	14 - 16	18

No.	器種	地緯 / 解	現存	特徴		写真図版	目録
				土色	土性		
SI305 (A - A') (D - D')	1	褐色	(2.5Y4/2)	砂質シルト	堆山小ブロック、炭灰を少し含む		周辺樹木抜き穴が
	2	オーブン褐色	(2.5Y4/4)	シルト	堆山小ブロックを多く含む		周辺樹木薄土
	3	褐色	(2.5Y4/2)	砂質シルト	堆山小ブロック、炭灰を含む		凹凸部地質土
	4	にふい黄褐色	(2.5Y5/4)	細土質シルト	堆山小ブロックが多く含む		海方埋土
	5	オーブン褐色	(2.5Y4/3)	シルト	堆山小ブロック多く含む		PI308 住灰
	6	暗赤リバーカラー	(2.5Y5/3)	シルト	堆山小ブロックを含む		PI308 住穴埋土
SI306 カマド煙道 (B - B')	1	にふい黄褐色	(10YR4/2)	シルト	堆山のブロックを含む。炭灰を多く含む		煙道埋土
	2	暗赤色	(10YR3/4)	シルト	堆山のブロックを多く含む。炭灰、熟土粒をわずかに含む		煙道埋土
	3	暗赤色	(10YR3/3)	シルト	堆山小・中土粒、炭灰を少し含む		カマド施薬土か
	4	暗赤色	(10YR3/4)	シルト	堆山小・中土粒、上面に炭灰		烟道埋土
	5	にふい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	堆山のブロックを多く含む		烟道埋土
	6	暗赤色	(10YR3/4)	シルト	疊上段、炭灰を若干含む		烟道埋土
	7	暗赤色	(10YR4/4)	シルト	疊上段、炭灰を含む		東方埋土
	8	暗赤色	(10YR3/4)	シルト	堆山小を多く含む、灰鉄岩を含む		東方埋土
SI306 K1 (C - C')	1	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	堆山のブロック、熟土・ロック、炭灰を含む		寄穴穴埋土
	2	黒褐色	(10YR2/3)	シルト	堆山のブロック多く含む、炭灰を含む		東方埋土
SI306 (E - E') (F - F')	1	黒褐色	(10YR2/3)	シルト	炭灰を含む		東方埋土
	2	研磨色	(10YR2/4)	シルト	炭灰を含む		東方埋土
	3	にふい黄褐色	(10YR3/3)	シルト	堆山のブロックを含む		東方埋土
	4	灰褐色	(10YR5/2)	砂質シルト	堆山のブロックを多く含む		東方埋土
	5	オーブン褐色	(2.5Y4/3)	砂質シルト	堆山のブロック、黑褐色熟土ブロックを多く含む		東方埋土
	6	暗赤色	(10YR3/2)	砂質シルト	堆山のブロックを多く含む		東方埋土
	7	暗赤色	(10YR3/4)	砂質シルト	地丘段、炭灰を含む		周辺施方埋土
	8	暗赤色	(10YR3/6)	シルト質砂	地丘段、炭灰を含む		東方埋土
PI302 (G - G')	1	黒褐色	(10YR2/2)	シルト	地丘段、炭灰を含む		柱抜取穴
	2	にふい黄褐色	(10YR5/4)	粘土質シルト	地丘段を少し含む		柱抜取穴
PI303 (H - H')	1	暗赤色	(10YR3/3)	砂質シルト	地丘段のブロックを少し含む		柱穴埋土
	2	暗赤色	(10YR3/2)	シルト	地丘段のブロックを多く含む		埋土
PI305 PI306 (I - I')	1	暗赤色	(10YR3/2)	シルト	地丘段のブロックを多く含む		柱抜取穴
	2	暗赤色	(10YR3/3)	シルト	地丘段を多く含む		柱抜取穴
	3	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	地丘段のブロックを多く含む		林立埋土
	4	灰褐色	(10YR3/3)	シルト	地丘段のブロックを多く含む		柱抜取穴
	5	暗赤色	(10YR3/2)	シルト	地丘段のブロックを多く含む		柱抜取穴
	6	暗赤色	(10YR3/2)	シルト	地丘段のブロックを非常に多く含む		柱穴埋土

第 12 図 SI305・SI306 住居跡 平・断面図・出土遺物

【柱穴】住居内で柱穴を1個(Pit.308)確認した。長軸48cm、短軸22cmの隅丸方形で、深さは27cmである。主柱穴の可能性がある。

【周溝】南辺と東辺の一部が削平されているが、本来は住居を全周すると考えられる。上幅14~24cm、深さ12cmで、断面形はU字状である。西辺では住居の壁を約7cm外側に抉り込んで掘られており、断面形はL字状である。周溝は地山小ブロックを含む暗灰黄色砂質シルトで人為的に埋め戻されており、抉り込みの部分には地山小ブロックを含む暗灰黄色砂質シルトが堆積している。

【カマド】燃焼部と煙道の一部が残存する。燃焼部の大きさは幅60cm、奥行き約70cmである。燃焼部は周溝を埋め戻して構築されており、底面は皿状に窪んでいる。奥壁は住居壁よりやや内側である。煙道は長さ100cm、幅約18cm、深さ10cmで、先端部がほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は、炭や煙道崩落土を多く含む暗褐色シルトを主体とする自然堆積である。

【貯蔵穴】カマド右脇で1基確認した(K1)。長径60cm、短径42cmの楕円形で、深さは約10cmである。焼土・炭、地山ブロックを含む黒褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

【出土遺物】周溝から提げ砥石1点が出土している(第12図、写真図版14)。カマド堆積土からは須恵器が出土しているが、図示できるものはなかった。

【S I 306住居跡】(第11、12図)

V区中央で検出した。後世の削平により周溝のみ確認した。

【重複】S I 202、S I 305住居跡、S K 320土坑と重複し、S I 305住居跡より新しく、S I 202住居跡より古い。S K 320土坑との新旧関係は不明である。

【規模・平面形】南北約6.6m、東西約4.8m以上で、平面形は方形である。

【方向】西辺でみると北で6°西に偏する。

【柱穴】住居内で柱穴を5個(Pit.302、Pit.303、Pit.304、Pit.305、Pit.306)確認した。位置関係からPit.302、Pit.306は主柱穴の可能性がある。

【周溝】北東部分が調査区外で、西辺、東辺、南辺の一部が削平されているが、住居をほぼ全周すると考えられる。北辺の周溝は幅10cmの壁材抜取痕が認められる。北辺は上幅40cm、深さ26cmで、その他の上幅14~28cm、深さ12~18cmで断面形はU字状である。埋土は焼土、炭を含む暗褐色砂質シルトである。

【出土遺物】掘方埋土と周溝から須恵器、土師器壺が出土しているが図示できるものはなかった。

【S I 304住居跡】(第13図)

V区東部で住居跡の西辺と南辺の一部を検出した。周溝と掘方埋土の一部のみ残存している。

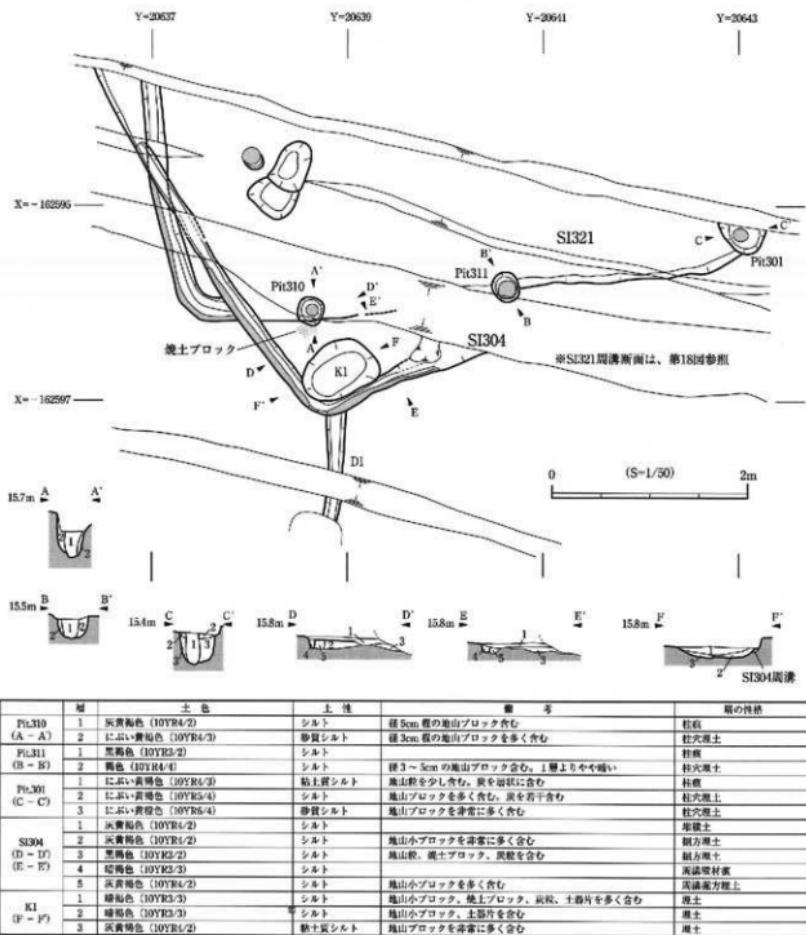
【重複】S I 321住居跡と重複し、これより新しい。

【規模・平面形】南北4.3m以上、東西1.9m以上で、平面形は方形と考えられる。

【方向】西辺でみると北で33°西に偏する。

【柱穴】住居内で柱穴を3個確認したが、住居に伴うかは不明である。

【周溝】南隅のみ確認した。幅7cmの壁材痕跡が認められる。上幅17cm、深さ約10cmで、断面形はU字状である。埋土は地山小ブロックを多く含む灰黄褐色シルトである。



第13図 SI304・SI321住居跡 平・断面図

【土坑】住居南隅で土坑を1基（K1）確認した。周溝掘方と重複し、これより新しい。長径76cm、短径56cmの楕円形で、深さは12cmである。断面形は皿状である。堆積土は地山ブロック、焼土ブロック、炭粒、土器片を多く含む暗褐色シルトで埋め戻されている。位置や形状、堆積土の特徴から住居に伴う貯蔵穴と考えられる。

【その他の施設】住居南端から南に向かって延びる溝跡を確認した（D1）。長さ110cm、幅18cm、残存する深さは10cmで、断面形はU字状である。堆積土は灰黄褐色シルトが自然堆積している。溝跡底面は周溝より1段低く、掘方底面とほぼ同じ深さである。この住居跡に伴う外延溝と思われる。

【堆積土】1層で灰黄褐色シルトが自然堆積している。

【出土遺物】掘方埋土から須恵器壺、周溝とK1から土師器壺の底部破片が出土している（第14図）。



第14図 SI3041 住居跡 出土遺物

【SI 321住居跡】（第13図）。

【位置】V区東部で住居跡の南辺付近を検出した。周溝と掘方埋土の一部のみ残存している。

【重複】SI 304住居跡と重複し、これより古い。

【規模・平面形】南北2.5m以上、東西6.0m以上で、平面形は方形と考えられる。

【方向】西辺でみると北で10° 西に偏する。

【柱穴】住居跡南辺に柱穴を3個確認した（Pit310、Pit311、Pit301）。直径30cm前後の円形で、残存する深さは20～36cmである。壁柱穴の可能性がある。埋土は地山ブロックを含むにぶい黄褐色シルトを主体とする。柱痕跡は直径12～18cmの円形で、堆積土は黒褐色シルトである。この他住居内で小穴を3個確認したが、住居に伴うかは不明である。

【周溝】南西部のみ確認した。幅7cmの壁材痕跡が認められる。上幅17cm、残存する深さ10cmで、断面形はU字状である。埋土は地山小ブロックを多く含む灰黄褐色シルトである。

【出土遺物】掘方と周溝埋土から土師器が出土しているが図示できるものはなかった。

【SI 307A・B住居跡】（第15図）。

V区東部で住居跡の北半を検出した。ほぼ同じ位置で1度建て替えられており、古い方からA、Bとする。後世の削平によりSI 307Bの壁と床面は残存していない。

【重複】SI 328住居跡、SD 308、313、318溝跡、SK 314、327土坑と重複し、SI 328住居跡より新しく、その他の遺構より古い。

（SI 307A住居跡）

【規模・平面形】南北2.6m以上、東西約4.6mで、平面形は方形と考えられる。

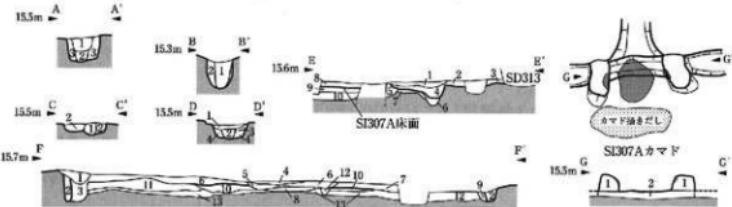
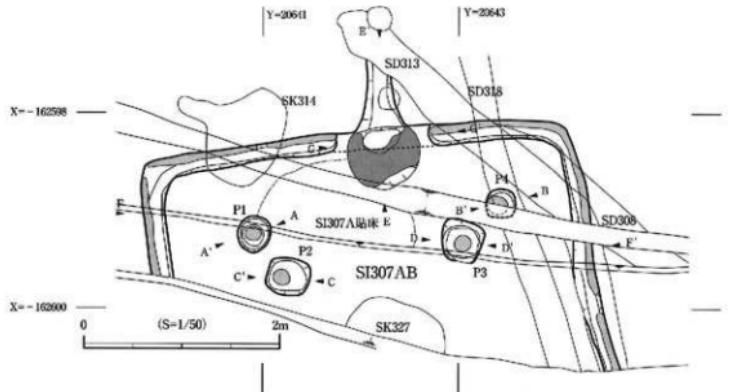
【方向】東辺でみると北で12° 西に偏する。

【壁】床面から確認面までの高さは残存の良い北辺で14cmである。

【床面】住居中央に厚さ4～6cmの貼床をし、そのほかは掘方埋土を床面としている。

【柱穴】主柱穴を2個（P1、P4）確認した。2ヶ所で柱痕跡を、1ヶ所で柱抜取穴を確認した。長軸30～35cmの円形で、深さは28～34cmである。埋土は地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色砂質シルトを主体とする。柱痕跡は直径約14～18cmの円形で、堆積土はにぶい黄褐色シルト質粘土である。

【周溝】SI 307B住居跡と同位置と考えられる。



	層 土色	土性	備考	層の性格
(A - A')	1 黄褐色 (10YR5/3)	シルト	東山小ブロックを含む	柱状取扱
	2 にぶい黄褐色 (10YR5/2)	シルト	東山小ブロックを含む	特質
	3 黄褐色 (25Y5/4)	泥混じり粘土	東山小ブロック主体	柱穴埋土
(B - B')	1 にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト質粘土	東山小ブロック主体。炭酸をわずかに含む	柱状取扱
	2 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	東山小ブロックを多く含む	柱穴埋土
(C - C')	1 黄褐色 (10YR5/3)	シルト	東山小ブロック、炭酸を含む	柱状
	2 黄褐色 (10YR4/3)	シルト	東山小ブロック、炭酸を含む	柱穴埋土
(D - D')	1 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	東山小ブロックを多く含む	柱状取扱
	2 茶色 (10YR4/4)	シルト	東山小ブロック、炭酸を含む	柱穴埋土
	3 茶色 (10YR4/4)	シルト	東山小ブロックを多く含む	柱状取扱
	4 にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘土質シルト	東山小ブロックを非常に多く含む	柱穴埋土
(E - E')	1 黄褐色 (10YR5/3)	シルト	東山小ブロックを含む	カマド埋積土
	2 黒褐色 (10YK3/2)	シルト	東山小ブロックを含む	崩落土
	3 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	東山小ブロック、炭酸を含む。	カマド埋積土
	4 黄褐色 (10YR3/2)	シルト	地上段、炭酸、東山小ブロックを少し含む。上面に礫面	礫めらか土
	5 黑褐色 (10YR2/3)	シルト	東山小ブロックを多く含む	A 南斜面土
	6 にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	炭酸、砂粒を少し含む	A 明暗土
	7 茶色 (10YR4/4)	シルト	東山小ブロック主体。炭酸を多く含む。上面に礫面	A 南斜面土
(F - F')	8 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	東山小ブロックを多く含む。東山小ブロックを若干含む	B 側方埋土
	9 黑褐色 (10YR3/4)	シルト	東山小ブロックを多く含む。炭酸を若干含む	A 砂粘土
	10 黄褐色 (10YR4/2)	シルト	東山小ブロック主体。炭酸を若干含む	A 植生土
	11 黄褐色 (10YR3/4)	シルト	東山小ブロックを非常に多く含む。東山小ブロックを含む。炭酸を少し含む	B 側方埋土
SI307 (F - F')	12 黄褐色 (10YR2/3)	シルト	東山小ブロックを含む	A 南斜面土
	13 黑褐色 (10YR4/2)	シルト	東山小ブロック主体	A 南斜面土
	1 黄褐色 (10YR3/2)	シルト	東山小ブロック主体。内面に礫面の痕跡あり	カマド埋積
	2 にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	炭酸、砂粒を少し含む	周辺斜方埋土

第15図 SI307AB 平・断面図

〔カマド〕 燃焼部と側壁の一部が残存している。燃焼部の大きさは幅78cm、奥行き約62cmである。燃焼部はS I 307A住居跡周溝埋土上面を底面としており、周溝部分で窪んでいる。奥壁は住居の壁と一致する。カマド側壁は地山ブロックを主体とする暗褐色シルトで周溝埋土上に直接積んで構築している。煙道は不明であるがS I 307B住居跡と同じ位置にあったと考えられる。

〔出土遺物〕 挖方埋土から土師器が出土しているが、図示できるものはなかった。

〔S I 307B住居跡〕

〔規模・平面形・方向〕 S I 307A住居跡と共通する。

〔柱穴〕 主柱穴を2個(P2、P3)確認した。2カ所で柱痕跡を、1カ所で柱抜取穴を確認した。長軸40~45cm、短軸40cmの隅丸方形で、深さは12~18cmである。埋土は地山ブロックを多く含むふい黄褐色粘土質シルトを主体とする。柱痕跡は直径約15cmの円形で、堆積土は暗褐色シルトである。

〔周溝〕 北辺と東辺・西辺の一部で確認した。住居をほぼ全周すると考えられ、北辺中央のカマド部分で途切れる。幅8cmの壁基痕跡が認められる。上幅18~22cm、深さ14~30cmで、断面形はU字状である。埋土は地山小ブロックを含む暗褐色シルトを主体としている。

〔カマド〕 燃焼部と煙道の一部が残存している。燃焼部の大きさは幅74cm、奥行き約60cmである。燃焼部はS I 307A住居跡の周溝上に構築されており、底面は皿状に窪んでいる。奥壁は住居の壁と一致する。煙道は残存する長さ70cm、幅約26cm、深さ5~10cmである。堆積土は、煙道崩落土を含む黒褐色シルトを主体とする自然堆積である。

〔出土遺物〕 周溝や煙道堆積土などから土師器が出土しているが、図示できるものはなかった。

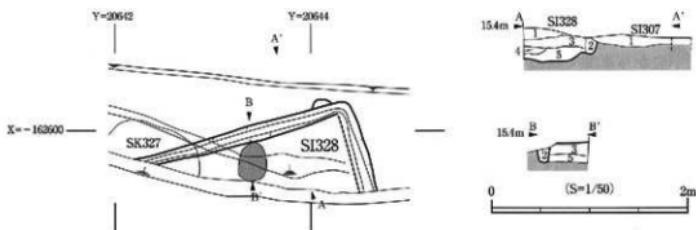
〔S I 328住居跡〕(第16図)

V区東部で住居跡の北東隅付近を検出した。周溝と掘方埋土の一部、カマド焼面のみを確認した。

〔重複〕 S I 307住居跡、S D313、S D318溝跡、S K327土坑と重複し、これらより古い。

〔規模・平面形〕 南北1.0m以上、東西2.4m以上で、平面形は方形と考えられる。

〔方向〕 東辺でみると北で20°西に偏する。



層	土色	土性	備考	層の性格
1	オリーブ褐色(2SY5/3)	砂質シルト	地山ブロックを含む	S I 307 掘方埋土
2	にじむ黄褐色(10YR5/4)	砂混じり粘土	地山ブロックを多く含む。上面に焼け面	周溝岸壁土
3	浅黄色(25Y7/4)	砂混じり粘土	地山ブロック主体	側方埋土
4	浅黄色(25Y6/3)	砂混じり粘土	地山ブロック主体	側方埋土
5	浅黄色(7.5YR5/6)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む	側方埋土

第16図 SI 328住居跡 平・断面図

【周溝】北辺と東辺の一部で確認した。上幅約15cm、残存する深さ15~20cmで、断面系はU字状である。埋土は地山小ブロックを含むオーリープ褐色砂質シルトである。

【カマド】北辺東寄りに焼面のみ確認した。長径40cm、短径26cmの楕円形で、住居掘方埋土が被熱によって赤変している。

【出土遺物】遺物は出土していない。

このほか、5区西部S I 201住居跡の南東で柱穴3個を確認した（第7図）。S D 203溝跡に壊されて残存していないが、本来は対角線上に4個配置されていたとみられる。平面形は直径52~56cmの円形または隅丸方形で、残存する深さは10~23cmある。柱の位置や形状から本来は住居跡の主柱穴であったと考えられる。



	層	土色	土性	備考	層の性格
Pit 201 (E-E')	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト		柱穴壁土
	2	褐褐色 (10YR5/4)	シルト	砂混じりの灰黒褐色シルトブロック含む	柱穴壁土
	3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	黄褐色シルト大ブロック含む	柱穴壁土
Pit 202 (F-F')	1	褐褐色 (10YR5/4)	シルト		柱孔
	2	褐褐色 (10YR5/3)	シルト	塊状ブロックを含む	柱穴壁土
Pit 203 (G-G')	1	褐褐色 (10YR5/4)	シルト	黄褐色シルト粘土をわずかに含む	柱孔
	2	褐褐色 (10YR4/4)	シルト	黄褐色シルト粘土を含む	柱穴壁土

第17図 SI201 南側柱穴断面図

B. 溝跡（第6図）

古代と考えられる溝跡はS D 303溝跡のみで、その他はいずれも時期不明である。なお、S D 318溝跡出土の須恵器壺は、S I 307住居跡と重複している部分から出土しており、本来は住居跡に伴う遺物であった可能性が高い（第20図）。以下では主なものについて説明する。

【S D 303溝跡】（第18図）

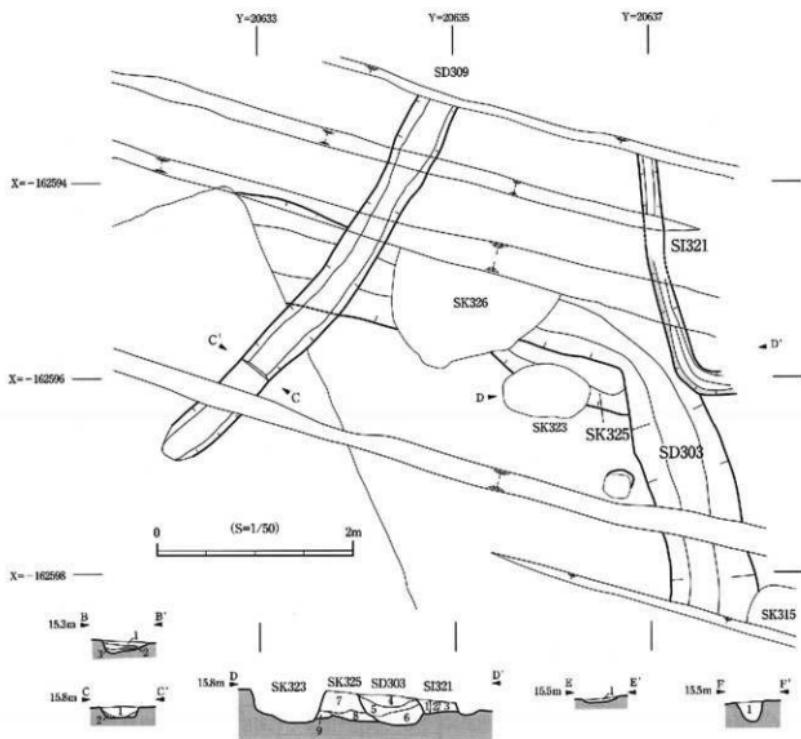
V区中央から東部で検出した。東西-南東方向にL字状に屈曲する。S I 202、S I 321住居跡、S D 309溝跡、S K315、S K325、S K326土坑と重複し、S K325より新しく、その他の遺構より古い。西側は浅くなり、西端はS I 202住居跡に壊されて不明である。検出長は6.8mで、上幅約80cm、下幅約40cm、深さは約30cmで断面形は皿状である。堆積土は3層で、にぶい黄褐色シルト質砂を主体とする自然堆積である。遺物は土師器壺が出土しているが、図示できるものはなかった。

【S D 203溝跡】（第19図）

V区西部で検出した東西方向の溝跡である。S I 201住居跡と重複し、これより新しい。検出長は6.2mで、西端は調査区西壁からさらに延びる。上幅50~70cm、下幅20~40cmである。深さは約20cmで断面形は皿状である。堆積土は2層で、にぶい黄褐色砂質シルトを主体とする自然堆積である。遺物は須恵器壺・壺が出土しているが、図示できるものはなかった。

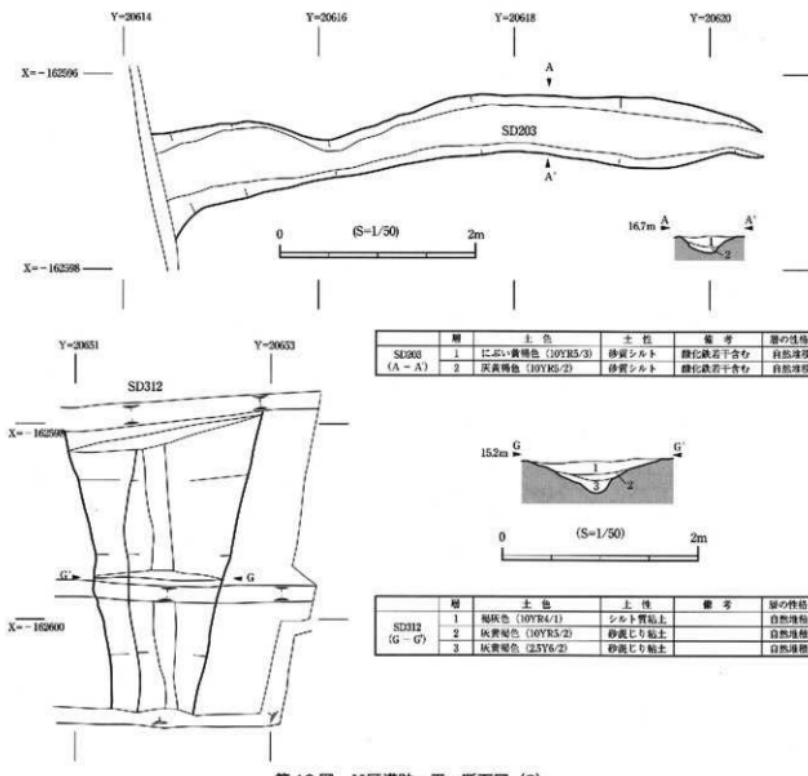
【S D312溝跡】(第19図)

V区東部で検出した南北方向の溝跡で、重複はない。検出長は2.9mで、上幅約70cm～200cm、下幅約12～24cmである。深さは約35cmで断面形はV字状である。堆積土は3層で、灰黃褐色砂混じり粘土を主体とする自然堆積である。遺物は出土していない。

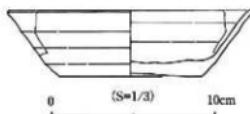


	層	土色	土性	参考	層の性格
SD324 (B - B')	1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	黒色シルトブロックを若干含む。黄褐色シルトを若干含む	自然堆積
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	均質な層	自然堆積
	3	褐色 (10YR3/2)	シルト	黒色シルトブロックを1箇より多く含む	自然堆積
SD309 (C - C')	1	褐色 (10YR3/2)	シルト	堆山小ブロックを少々含む	自然堆積
	2	褐色 (10YR2/2)	シルト	堆山小ブロックを多く含む	自然堆積
SD321 SD303 SK325 (D - D')	1	にふく・黄褐色 (10YR4/3)	シルト	堆山小ブロック含む	SD321 槽溝堆积物
	2	にふく・黄褐色 (10YR3/3)	シルト	堆山小ブロックを多く含む	SD321 槽溝堆方土
	3	にふく・褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	堆山泥を含む	SD321 褐色埋土
SK321 SD303 SK325 (E - E')	4	褐色 (10YR3/2)	砂質シルト		SD303 堆積土
	5	にふく・黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	堆山ブロックを含む	SD303 堆積土
	6	にふく・黄褐色 (10YR5/3)	シルト質砂	堆山ブロックを含む	SK325 堆土
SD312(E - E') SD318(F - F')	7	浅灰色 (2.5Y7/4)	砂質シルト	堆山ブロック主体	
	8	にふく・黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	堆山ブロックを含む	SK325 堆土
	9	にふく・黄褐色 (10YR5/3)	砂質シルト	堆山ブロックを含む	SK325 堆土
SD312(E - E')	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを含む	自然堆積
SD318(F - F')	1	灰褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	地山小ブロック、炭、土器片を含む	堆土

第18図 V区溝跡 平・断面図(1)



第19図 V区溝跡 平・断面図(2)



No.	器種	遺構/解	残存	決量(cm)			器形	写真図版	發見
				口徑	底径	高さ			
1	田中器 坪	SD318	L/3	(140)	(60)	3.3	内側:コクロ ナギ(櫻葉) 【底】田中ヘサ 切り 底成不良	14 - 12	16

第20図 SD317 溝跡出土土器

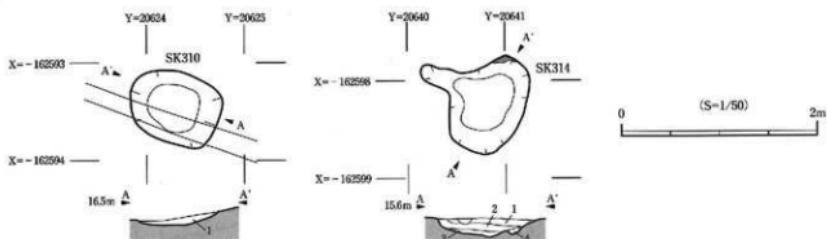
C. 土坑

【SK310土坑】(第21図)

V区西部で検出した。重複はない。長径94cm、短径70cmの楕円形で、深さは約10cmである。断面形は浅い皿状である。堆積土は1層で、地山ブロックを含む暗褐色シルトが自然堆積している。遺物は出土していない。

【SK314土坑】(第21図)

V区東部で検出した。S1307住居跡と重複し、これより新しい。長径100cm、短径80cmの梢円形で西側に突出部がつく。深さは約20cmである。断面形は浅い皿状である。堆積土は4層で、炭、焼土ブロックを多く含む黒褐色シルトで埋め戻されている。遺物は土師器が出土しているが、図示できるものはなかった。



	層	土色	土性	備考	層の性質
SK310 (A-A')	1	褐褐色 (10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む	自然堆積
	1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山小ブロック、焼土ブロック、炭小ブロックを含む	堆土
SK314 (A-A')	2	黒褐色 (10YK3/2)	砂質シルト	炭を非常に多く含む。地山小ブロック、焼土ブロックを含む	堆土
	3	オーブ褐色 (25Y4/4)	砂質シルト	地山小ブロック、炭を少し含む	堆土
	4	黒褐色 (20Y3/2)	シルト	地山小ブロック、炭を非常に多く含む	堆土

第21図 V区土坑 平・断面図(1)

【SK315土坑】(第22図)

V区東部で検出した。SD303溝跡、SK316土坑と重複し、SD303溝跡より新しく、SK316土坑より古い。SK316土坑と現代の道路側溝に大部分を壊されており、規模や平面形は不明である。深さは約8cmで、断面形は浅い皿状である。堆積土は1層で、地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルトで埋め戻されている。遺物は土師器が出土しているが、図示できるものはなかった。

【SK316土坑】(第22図)

V区東部で検出した。SK315、SK317土坑、S1304住居跡-D1と重複し、これらより新しい。南側を現代の道路側溝に壊されているが、長軸56cm以上、短軸54cmの梢円形であると考えられる。深さは約20cmで、断面形は皿状である。堆積土は2層で、地山ブロックを非常に多く含む灰黄褐色粘土質シルトなどで埋め戻されている。遺物は土師器が出土しているが、図示できるものはなかった。

【SK317土坑】(第22図)

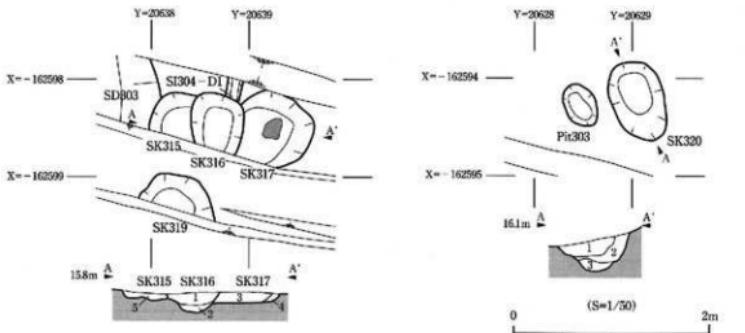
V区東部で検出した。SK316土坑と重複し、これより古い。一部をSK327土坑や現代の道路側溝、水道管に壊されているが、直径70cm以上の円形であると考えられる。深さは12cmで、断面形は浅い皿状になるとされる。堆積土は2層で、炭、焼土ブロックを多く含む黒褐色シルトなどで埋め戻されている。また底面に焼面があり、各層の底面から立ち上がる部分に焼土ブロックが層状に堆積している。遺物は土師器が出土しているが、図示できるものはなかった。

【S K319土坑】(第22図)

V区東部で土坑北半部を検出した。重複はない。上部を現代の道路側溝に壊されている。平面形は不明であるが、直径約80cmの円形であると考えられる。深さは約20cmで、断面形は浅い皿状である。堆積土は3層で、炭粒を多く含む暗褐色シルトなどで埋め戻されている。遺物は出土していない。

【S K320土坑】(第22図)

V区中央で検出した。S I 306住居跡と位置的に重複するが、新旧関係は不明である。長径86cm、短径56cmの楕円形である。深さは約35cmで、断面形は皿状である。堆積土は3層で、地山ブロックを含む暗褐色シルトなどで埋め戻されている。遺物は出土していない。



	層	土色	土性	備考	層の性格
(A - A')	1	黒褐色 (D7YK3-2)	シルト	地山ブロックを含む	S K315 墓土
	2	灰黒褐色 (D7YR4-2)	粘土質シルト	地山ブロックを非常に多く含む	S K316 墓土
	3	黒褐色 (D7YR3-2)	シルト	地山ブロック、炭粒質次に入る	S K317 墓土
(A - A')	4	黒褐色 (D7YR3-2)	シルト	地山ブロックに入れる	S K317 墓土
	5	灰黒褐色 (D7YR1-2)	シルト	地山ブロックを含む	S K315 墓土
	6	灰黒褐色 (D7YR2-2)	シルト	地山ブロックを多く含む	S K316 墓土
(A - A')	1	黒褐色 (D7YK2-2)	シルト	地山ブロックを含む	地山
	2	黒褐色 (D7YK3-2)	シルト	地山ブロックを含む	地山
	3	にぶく黄褐色 (D7YR5-4)	粘土質シルト	地山ブロックを少し含む	地山

第22図 V区土坑 平・断面図 (2)

【S K323土坑】(第23図)

V区中央で検出した。S D303溝跡、S K325土坑と重複し、これらより新しい。長径90cm、短径55cmの楕円形である。深さは約30cmで、断面形は不整形である。堆積土は2層で、黄褐色砂ブロックを含む灰黒褐色シルトなどで埋め戻されている。遺物は出土していない。

【S K325土坑】(第23図)

V区中央で検出した。S D303溝跡、S K323、S K326土坑と重複し、これらより古い。新しい遺構や水道管によって大きく壊されているが、長径150cm以上、短径100cm以上の楕円形と考えられる。深さは約30cmで、断面形は不明である。堆積土は3層で、浅黄色砂質シルトなどで埋め戻されている。遺物は出土していない。

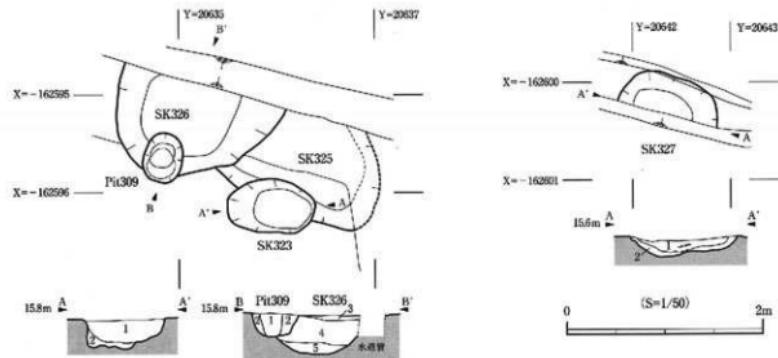
【S K326土坑】(第23図)

V区中央で検出した。北半部は水道管によって壊されている。S D303溝跡、S K325土坑と重複し、

これらより新しい。新しい遺構や水道管によって大きく壊されているが、長径170cm、短径100cm以上の楕円形と考えられる。深さは約44cmで、断面形は皿状である。堆積土は3層で、地山ブロックを非常に多く含む暗褐色粘土質シルトなどで埋め戻されている。遺物は出土していない。

【SK327土坑】(第23図)

V区東部で土坑の北半部を検出した。S I 307、S I 328住居跡と重複し、これらより新しい。上部は現代の道路側溝によって大きく壊されているが、長径約110cm、短径40cm以上の楕円形と考えられる。深さは約20cmで、断面形は浅い皿状である。堆積土は2層で、地山ブロック、炭化物、焼土粒を含む黒褐色シルトなどで埋め戻されている。遺物は土師器甕、須恵器壺が出土しているが図示できるものはなかった。



層	土色	土性	層考	層の性質
SK323 (A - A')	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	黄褐色砂ブロックを含む	腐土
	にかく黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	地山ブロックを含む	腐土
SK326 (B - B')	にかく黄褐色 (10YR6/3)	シルト質砂	砂粒を多く含む	粘土
	にかく黄褐色 (10YR6/4)	シルト質砂	砂粒、地山小ブロックを含む	粘土塊上 自然堆积
Pit309	褐色 (10YR3/2)	砂質シルト		
SK327 (A - A')	褐色 (10YR3/3)	シルト質砂	砂粒を多く含む	腐土
	にかく黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	地山大ブロックを含む	腐土
SK336 (A - A')	褐色 (10YR2/3)	シルト	地山小ブロック、埴土块、瓦片を若干含む	腐土
	にかく褐色 (10YR2/3)	シルト	地山ブロックを多く含む、埴土粒、瓦片を若干含む	腐土

第23図 V区土坑 平・断面図 (3)

第IV章 総括

古代と考えられる遺構を、IV区・IV区南で溝跡2条、土坑2基、V区で竪穴住居跡1軒、溝跡1条、土坑11基を検出した。それ以外の建物跡や溝跡、土坑などは出土遺物が少なく時期不明である。切り合いで古代の遺構より新しいものが多く、遺跡から中世の遺物も出土していないことから、ほとんどが近世以降である可能性が高い。

比較的狭い範囲の調査であったため全体を把握できる遺構は少なく、削平されている部分も多いが、遺構が多く検出されたV区を中心に要点を整理しておきたい。

【遺構の年代】

堅穴住居跡を建て替えたも含めて10軒確認し、このうち S I 202堅穴住居跡は南辺を除くほぼ全体を確認した。床面および貯蔵穴の出土遺物には、内面が黒色処理された有段丸底の壺と長脇壺がある。

壺は、丸底で器高が低く、口縁部が内弯する器形で、体部下半に段を形成し、内面には明瞭な段が見られない特徴を持つ。器面は外面が口縁部ヨコナデ、体部は削り、内面はヘラ磨きで調整されている。壺は短い口縁部で胴部最大径が上半にある。頸部に沈線があり、胴部がハケメ→ヘラミガキで調整されたものと、頸部に軽い段があり、胴部はハケメが部分的に確認できるものがある。このほか、S I 202C住居跡主柱穴掘方埋土から器形が逆台形状で底部回転ヘラ削り調整の須恵器壺が出土している。

こうした土器の特徴は、大崎市新田柵跡推定地 S I 73b（田尻町教育委員会：1998）や栗原市御駒堂遺跡第22号住居跡（小井川・小川：1982）、栗原市糠塚遺跡第16号住居跡出土資料などの一部に類似し、これらは8世紀後半の年代が与えられている。本住居跡出土遺物も8世紀後半頃と考えたい。

S I 304住居跡は、貯蔵穴と考えられるS I 304-K1から直線的に外傾するロクロ土師器壺、周溝から底部回転糸切り無調整で内面が放射状にヘラ磨きされたロクロ土師器壺が出土しており、住居跡の年代は8世紀後葉～9世紀前半頃と推定される。S I 321住居跡はS I 304より重複関係で古いことからそれ以前と考えられる。

S I 307住居跡は重複関係からS D 318溝跡より古い。S D 318出土須恵器壺はS I 307住居跡由来である可能性が高い。逆台形状で底部が回転ヘラ切り無調整のもので、おおむね8世紀後半頃のものと考えられる。従って住居跡の年代はそれ以降と推定される。S I 308住居跡はS I 307住居跡より重複関係で古い。

S I 305、S I 306住居跡については重複関係からS I 202住居跡より古く、8世紀代と考えておきたい。

そのほかの遺構については出土遺物が少なく時期の特定は難しいが、S D 101、S D 102溝跡は堆積土に灰白色火山灰が認められ、S K 301、S K 302、S K 325、S K 326などの土坑は堆積土が住居跡や溝跡とほぼ共通した特徴をもつことから古代に属すると考えられる。繩文土器と石器各1点（写真岡版14-17・18）を除き遺跡全体から8世紀前半以前や9世紀後葉以降の遺物が出土していないことから、本遺跡の集落は主に8世紀後半～9世紀前半に営まれたと考えられる。

【堅穴住居跡の周溝について】

S I 202C住居跡東・西・北周溝やS I 305住居跡西周溝は住居の壁から外側に5～12cm抉り込むように横または斜め下方に掘られている。

S I 202C住居跡では周溝の壁際に壁材痕跡が認められ、その外側に住居壁に抉り込む溝状の掘り込みが巡っている。周溝掘方は地山小ブロックを多く含む黒褐色シルトで埋め戻されており、溝状の掘り込み部分には均質な黒褐色シルトが堆積している。

S I 305周溝は、地山小ブロックを多く含む暗灰黄色砂質シルトで人為的に埋め戻されており、壁材痕跡は確認されていない。住居西壁に抉り込む溝状の掘り込みには地山小ブロックを少し含む黒褐色

砂質シルトが堆積している。これらの抉り込んで掘られた溝の堆積土は、周溝掘方とは特徴が異なっており、その機能は壁材を固定するためではなく、暗渠として機能していたと考えられる。

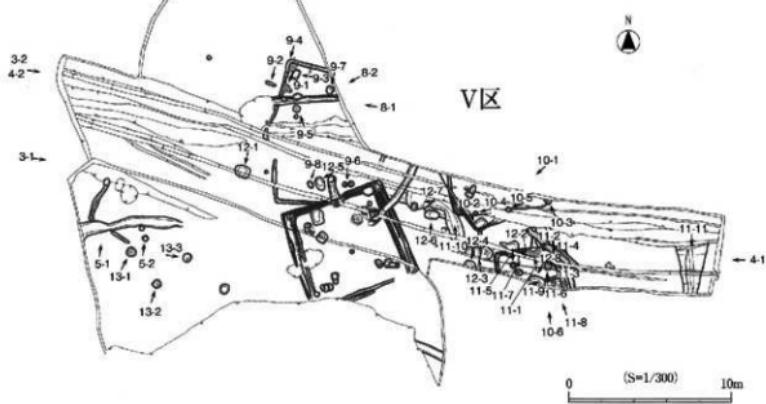
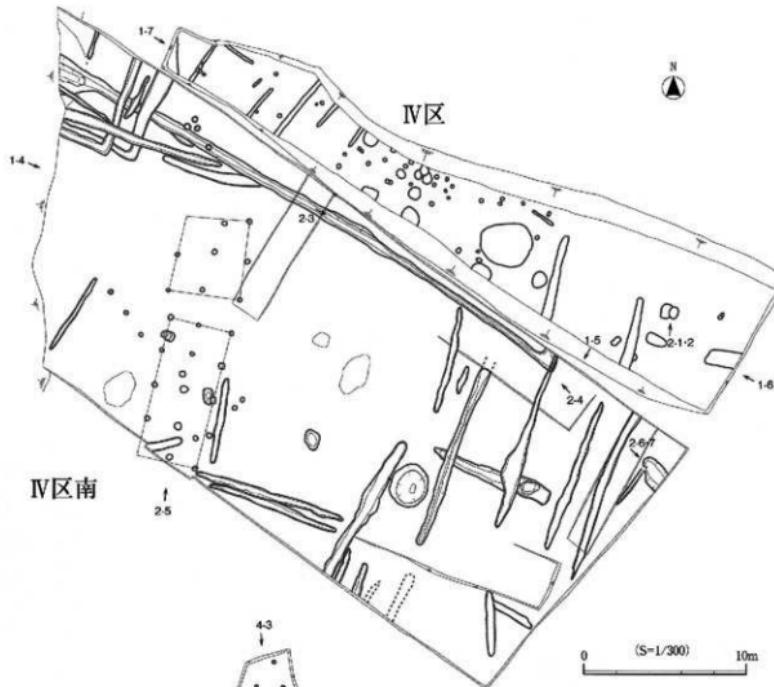
本遺跡の他に住居面壁を溝状に抉り込んで掘られた周溝は、沢田山西遺跡II区S I 34、S I 55堅穴住居跡、新田東遺跡I区S I 6、S I 8、S I 11、S I 34C、S I 38堅穴住居跡、新田櫛跡調査II区S I 64堅穴住居跡などで検出されている。それぞれ遺構の年代は8世紀後半と考えられている。機能については沢田山西遺跡S I 34C北・東周溝、S I 55カマド下周溝、新田東遺跡S I 8南・北周溝、新田櫛跡調査II区S I 64北周溝で、堆積土の状況から板や石で蓋をしていたものを含めて開渠、新田東遺跡S I 6西周溝、S I 11西周溝、S I 34C西周溝、S I 34D南・北周溝、S I 38西・南周溝については暗渠と考えられている。

また、これらの遺跡では同時期の住居跡が他にも検出されているが、住居壁を抉り込んで暗渠または開渠とするものは住居群の一部に認められるもので、住居構築方法の主体ではなかったと考えられる。

引用・参考文献

- 小井川和夫・小川淳一 1982「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VI』宮城県文化財調査報告書第83集
佐藤敏幸 2007「vi.宮城県北部・沿岸部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』辻 秀人編
村田晃一 2007「v.宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』辻 秀人編
田尻町教育委員会 1998「新田櫛跡推定地」田尻町文化財調査報告書第3集
美里町教育委員会 2007a「一本柳遺跡・牛飼遺跡」美里町文化財調査報告書第1集
美里町教育委員会 2007b「一本柳遺跡」美里町文化財調査報告書第2集
美里町教育委員会 2007c「小沼遺跡」美里町文化財調査報告書第3集
美里町教育委員会 2008「成田遺跡」美里町文化財調査報告書第4集
宮城県教育委員会 1998「一本柳遺跡I」宮城県文化財調査報告書第178集
宮城県教育委員会 2001「一本柳遺跡II」宮城県文化財調査報告書第185集
宮城県教育委員会 2003「新田東遺跡」宮城県文化財調査報告書第191集
宮城県教育委員会 2004「沢田山西遺跡」宮城県文化財調査報告書第196集

写 真 図 版





1. I・II区全景（西から）



2. I区全景（西から）



3. III区全景（東から）



4. IV区南全景（北西から）



5. IV区南造橋確認状況（北東から）



6. IV区全景（南東から）



7. IV区全景（北西から）





1. V区平成18年度調査区全景（西から）



2. V区全景（西から）



1. V区全景（東から）



2. V区全景実掘状況（西から）



3. V区北部（北から）



1. SI201住居跡（南から）



2. SI201-P1（南西から）



3. SI202C住居跡床面検出状況（南東から）



4. SI202B-P1, C-P1（南から）



5. SI202B-P2,C-P2（南から）



6. SI202C住居跡床面検出状況（北から）



7. SI202B-P3,C-P3（東から）



8. SI202C住居跡Pot.3出土状況（南から）



1. SI202A・B東側周溝（南東から）



2. SI202A・C西側周溝（南東から）



3. SI202C東側周溝（北西から）



4. SI202C周溝東側断面（北西から）



5. SI202-K1貯蔵穴（東から）



6. SI202-K2貯蔵穴（北から）



1. SI202A 検出状況（南東から）



2. SI202A-P1 (西から)



3. SI202A-P2 (西から)



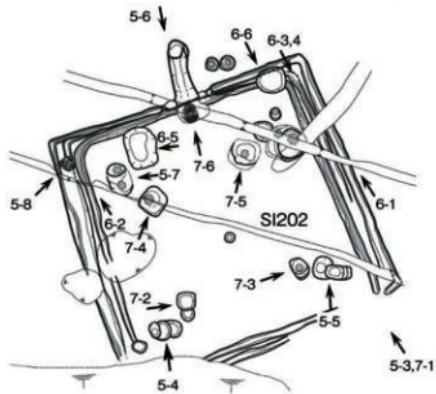
4. SI202A-P3 (南から)



5. SI202A-P4 (南から)



6. SI202C カマド検出状況（南から）





1. SI305・SI306住居跡（東から）



2. SI305住居跡（北東から）



1. SI305住居跡 カマド（北から）



2. SI305住居跡煙道（北から）



3. SI305-K1貯蔵穴（東から）



4. SI305住居跡周溝（北から）



5. Pit308（南から）



6. Pit305・Pit306（北から）



7. Pit302（南から）



8. Pit303（北東から）



1. SI304・SI321住居跡（北東から）



2. SI304-K1 貯藏穴（北西から）



3. Pit301（南から）



4. Pit310（東から）



5. Pit311（北東から）



6. SI307住居跡（南から）



1. SI307Aカマド（南から）



2. SI307Bカマド（東から）



3. SI307B堀方埋土・SI307A貼床ほか断面 (南東から)



4. SI307A-P4 (北から)



5. SI307A-P1(北から)



6. SI307B-P3 (南から)



7. SI307B-P2 (北から)



8. SI328住居跡 (南東から)



10. SD303溝跡・SK325土坑・SI321住居跡断面 (南から)



9. SI328住居跡焼面 (西から)



11. SD312溝跡 (北から)



1. SK310土坑（北東から）



2. SK314土坑（南東から）



3. SK315・SK316・SK317土坑（南から）



4. SK319土坑（北から）



5. SK320土坑（北東から）



6. SK323土坑（南から）



7. Pit309柱穴・SK326土坑（東から）



8. SK327土坑（北から）



1. Pit.201 (南西から)



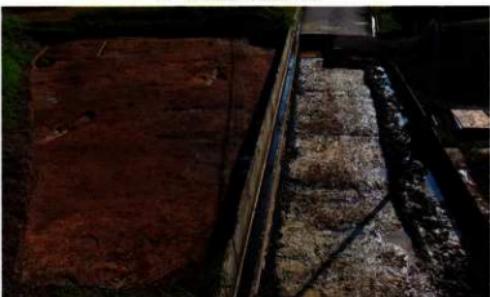
2. Pit.202 (南西から)



3. Pit.203 (西から)



4. VI区全景 (北東から)



5. VII区全景 (南東から)



6. SI202C住居跡床面 (Pot.3) (10-3)



7. SI202C住居跡K2 (Pot.2) (10-4)



- 1 S1202C住居跡床面直上
 2 S1202住居跡 Pit.307柱抜取穴
 3・7 S1202C住居跡床面
 4 S1202住居跡
 5・8 S1202B住居跡東方堆土
 6 S1202C住居跡-P4 東方堆土
 9・11 S1204住居跡-K1
 10 S1204住居跡 施溝埋方
 12 SD18溝跡埋積土
 13 IV区遺物確認時
 14 SD101溝跡埋積土
 15 SD102埋積土
 16 SD105住居跡周溝
 17 S1201住居跡周溝
 18 IV区南邊構築認定時

1~16 : S=1/3, 17・18 : S=2/3

報告書抄録

ふりがなけしょうざかいせき						
書名	化粧板遺跡					
副書名						
巻次						
シリーズ名	美里町文化財調査報告書					
シリーズ番号	第5集					
著者名	岩渕 雄也 千葉 直樹					
編集機関	美里町教育委員会					
所在地	〒987-8602 宮城県遠田郡美里町北浦字駒米13 TEL 0229-33-2175					
発行年月日	西暦2009年3月31日					
ふりがな所収遺跡名	ふりがな所所在地	コード		世界測地系	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号	北緯 東経		調査原因
化粧板遺跡	仙台市宮城県遠田郡美里町化粧板字小町井	045053	39031	38度	141度	370m ²
				32分	4分	2004.05.10～05.28 1,000m ²
				10秒	11秒	2005.04.21～04.22 116m ²
						2005.08.23 89m ²
						2006.10.30～11.07 156m ²
						2007.07.10～09.28 950m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
化粧板遺跡	集落跡	古代	堅穴住居跡 10 掘立柱建物跡 2 溝跡 43 土坑 30 柱穴 など	土師器 須恵器 砥石	8世紀後半～9世紀前半の堅穴住居跡を検出した。	
要約	化粧板遺跡は宮城県北部の美里町不動堂地区に所在し、江合川と鳴瀬川の間に形成された沖積地中の標高17mの低丘陵上にある。町道駅東不動堂線築道工事事業に伴い発掘調査を行った結果、古代の堅穴住居跡、溝跡、土坑などを検出した。年代は、出土遺物や重複関係などから8世紀後半から9世紀前半と考えられる。					

美里町文化財調査報告書第5集

化粧坂遺跡

平成21年3月25日印刷

平成21年3月31日発行

発行 美里町教育委員会
宮城県遠田郡美里町北浦字勝米13
印刷 株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24-24

